

禪鼎一味

蘆津實全著



019629-000-1

324-304

禪鼎一味

芦津 実全/著

M45.7

ABG-0409



324

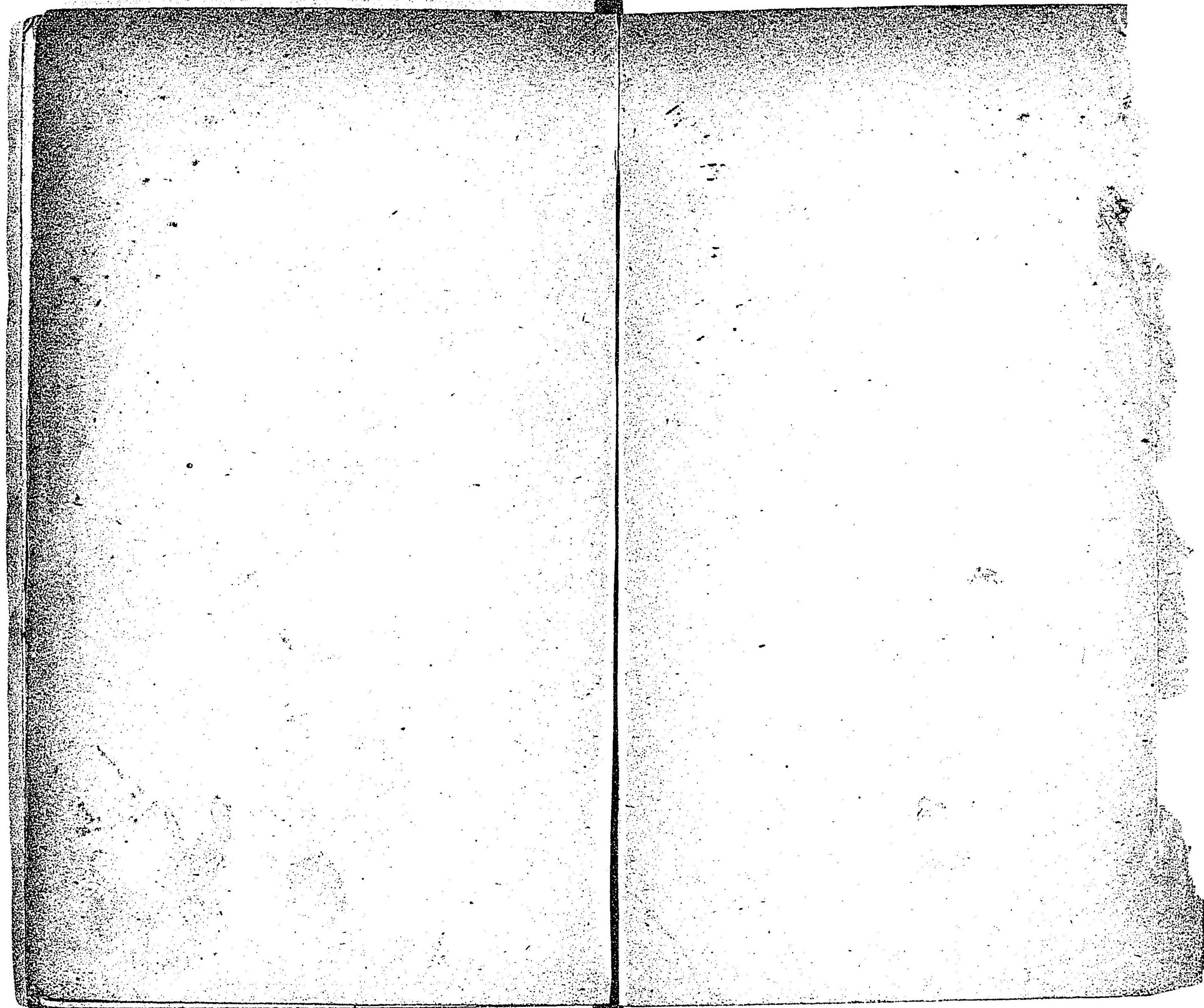
304

水源寺派管長蘆津實全禪師著

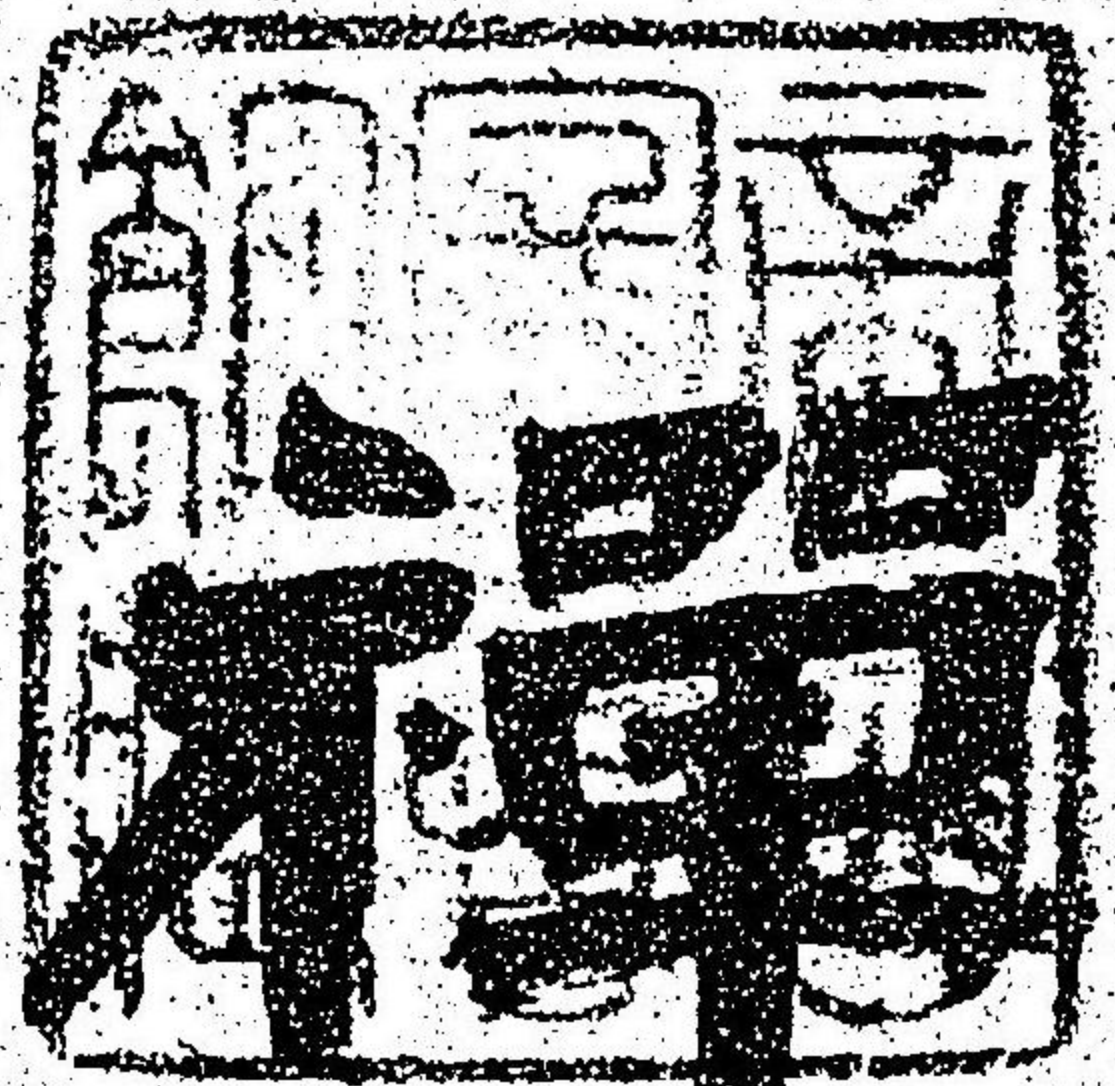
禪鼎一味

東京

文泉堂書房
服部書店



永源寺派 實全禪師著



鼎一味

明治
45. 7. 16
内交

東京

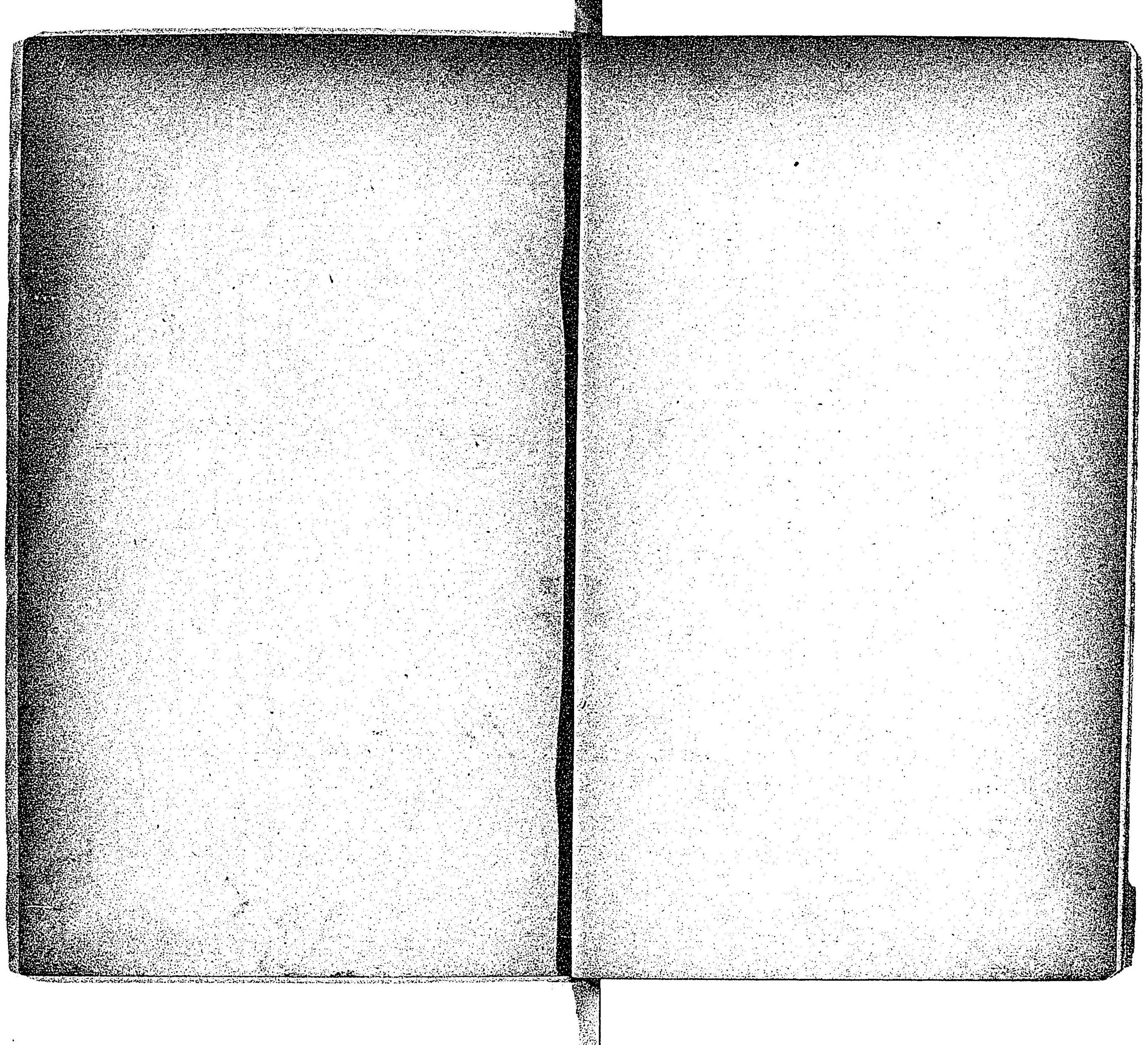
文泉堂書房
服部書店

禪鼎一味自序

美食不中飽人之喫膏粱佳肉有時屬于無益雖蔬食菜羹有勝于他金樽者無他投于飢人之一顧也吾禪鼎一味固雖不過于少許貼案待飢者也尙矣抑往昔武門執政教化者概爲禪僧禪化遍于都鄙源泉滾々流而不息結成日本魂發爲武士道兩洗風磨于茲七百年與國體發達與國民融合鎮護國家也悠久感化人心也宏遠斯篇固雖非鼎烹大牢者聊割精底一片以頌江湖抱道之士即是不過嚼飯養嬰兒之老婆心也已矣雖然若有就而染指者豈啻余筆頭伸法供養亦足以醫一時之飢乎序以告之

明治壬子立春節

津梁軒石蓮全識



禪鼎一味目次

◎鼎一味	一
◎生則命	五
◎公案古則	一一
◎悲智	二一
◎三德	三九
◎轉迷開悟	五五
◎理致機關向上	七二
◎古教照心	八〇
◎報恩	八三
◎宗教	九一
◎神佛	一一〇
◎禮拜祈禱	一二七
◎弘通	一三三

禪鼎一味目次終

禪鼎一味

石蓮 蘆津實全 著

鼎一味

禪鼎煮る所何の味ぞ、猫頭狐涎等の雜毒佛も煮る。祖も煮る。靈山黃面老の苦味、少林碧眼胡の毒藥道ふなかれ陳腐と、活人拈し來れば陳腐も亦珍味となる。老胡當年の坐久成勞、端なく明治昭代の今日、天下の英雄を坐殺し、湖海の雲衲を走殺して、氣海丹田に元氣を満たしむといふ坐禪法をば、二木醫學博士の手で、腹式呼吸法と賣直して出た、博士は正直なり、其自白に云く、腹式呼吸法は私の新發明かと云ふに左様ではない、數千年前より行はれつゝある方法で、只言葉が

腹式呼吸

違つて居る丈、氣海丹田と稱して、臍下二寸元氣充實して海の如く、此處に氣を練り疊む時は、心量寛大にして氣力常に勇壯なりと云ふてある、かゝる方法が日本に入つてよりは、武士道に使はれて膽力養成の良法となり、古來の英雄豪傑皆之によりて、心膽を練磨せられたのである、其効驗は肺炎には腹式呼吸法が尤も効果ある、次に血液の循環を助ける、次に神経質に尤も顯著なる功能があると云々、全く坐禪法の功能書である、次に岡田虎次郎氏の呼吸靜坐法も亦大に善し、吾人は何處の方面からでも可い、知己を得れば満足するのである、

呼吸法

一

唯心觀法

山海の珍味は赤肉團の枴腹を充たしむるも、道味を得せしむること能はず、吾這裏は直に身心の爽快を感じて、二世の利益を得せしむ、吾人の禪界にも亦、心身二病を治する、一舉兩得の腹式呼吸法あり、箇は曩に龍淵に於て、退耕先師より傳へ來りたるものにて、數息觀の一法なり、其種類は分つて三あり、輒蘇法と、數息觀と、唯心淨土已身彌陀觀なり、何れでも可い、撰り取りして根機に適するを用ゆべし、輒蘇法は本と阿含經說であることは、夜船閑話にも載せてあるが、吾人も先年靜坐荐りに行つて見て、其効驗を感じたことがある、次に數息觀は本と天台止觀に出てたる者なるが、先師の坐法は右手を將て右膝を指頭で衝き、一、二、三、四、と十に達する毎に、左指を屈して數へるのである、初めは六七十も息續

くが骨物であるが、次第に經驗が熟して來ると、一息に二百も無造作に續くこととなりて、丹田に氣満ちて腹は石の如くに堅くなつて、大に機能が顯はれた、次に唯心淨土觀は是れも閑話にあつたかと覺えるが、今ま暗記の儘を記して述べんに、先づ靜坐して觀念を一處に制するのである、其法は心を腹下に置き、吾が此の氣海丹田は唯心の淨土、淨土何の莊嚴がある、吾が此の氣海丹田は己身の彌陀、彌陀何の法をか説くを、繰り返し、觀念すると、漸々に逆上が降下し、丹田に力が一ぱい充ちて、下腹が堅くなつて來る、妙なもので他語では力がない淨土何の莊嚴がある、彌陀何の法をか説くと云ふ、此疑ひを起す語に、非常に力が著る故に、疑團が丹田に凝結して、自然に下腹に氣が充實して來るのである、予

が蒲柳の弱質も此腹式呼吸法に依つて、無病健全の體となつたは、全く坐禪の効力である、古歌に見るやいかに、加茂の競馬の駒くらべ、かけつかへつとも、坐禪なりけり、と、是れが吾人の鼎味である、怪むなけれ、空疎なるを。

生命

直指人心、見性成佛、擬議すれば、則ち喪身失命す、老胡當年萬里の水雲を跋渉して、資す所の塗毒鼓は、一たび金陵に音を傳へしより、嵩山に面壁九年、爾しより四百餘州聲を承け響を接して、見性の成佛のと咄々、一犬虚を吠れば、萬犬實を傳ふ、然れども記取せよ、先師の舍利猶ほ在り、祖翁の暖皮肉今に至るまで、東水西山阿堵の中に、面目に相見すること。

得る。是れ什麼。徒らに萬卷の書を暗んずるより、寧ろ見性の二字に參ぜよ。萬卷は人の智解を増長して、自由を束縛するも、見性は能く汝が胸中の妄想を蕩盡して、隨處に脱體見成せしむ。活きよく、天關活きされば、運用をなさず、地軸活きされば、死塊に均し、三世の諸佛は見性の活底より生れ來れり。見性は文字に依て義を解し、學問に依て得らるゝものではない、他人の力を藉りて門外より入り來るものは家珍に非ず、一々自己の胸襟より流出して、蓋天蓋地すべしとは、巖頭の葛藤なるが、外から假り入れたる智慧では力は著かぬ。活氣は人々の胸襟より流出して、光りを吐く。見性明心は大火聚の如し、近傍すべからず。大慧云く、古人皆心を明め、性を見る。今時の人例して、是れ心と説き、性と説く、好し、僞をして知ら

天蓋地の蓋

中峰の說
心説性

しむるに、三十年後箇の説底を討んと要するもまた無しと、箇は是れ世衰へ道微にして、心と説き、性と説くものも無く、なるを歎かれたるなり、中峰云く、何をか見性と謂ふ、行いて已に到るもの、是なり、何をか説性と謂ふ、行くことを待たずして、到るに似たるもの、是なり、此の語大に盡せり、説くは相似るもの、見るは實驗なり、實驗でない、此話行はれず、摸索不著では、恰かも影法師を捕えて、實體なりと擬し、賊を認め、て我子なりと爲すが如し、争てか眞實に撞著するを得ん。

二

古人云く、眉目は至近なるも見るべからず、心性は至親なるも知るべからず、眉目は見るべからずと雖も、鏡に臨むと

きは則ち之を見る、心性は固より知るべからざれども、徹悟すれば則ち之を知ると宜なる哉、見るの親しきに非ざれば、此段の事は且得没交渉である、苟くも徹悟に非ずして、心性の蘊奥を知らんと欲するは、是れ猶ほ鏡を離れて眉目を見んと欲するが如きのみ、豈夫れ得べけんや、見性成佛も亦然り、徹悟でなくては争てか己が面目を鏡中で見るが如くならんや、然り而して徹悟其人を得難きは、末世根機の劣弱なるに因るか否く、大心の人なきが爲なり、苟くも大信根あれば末世も佛在世も異なることなくして、勇猛の衆生の爲めに成佛一念に在り、信を是れ思はずして、罪を澆末に嫁し、已れに求めずして外に向つて馳す、是を脚跟地に著かざる造業の衆生となす。

成佛一念に在り

三

教と禪と

教は説ふと云ひ、禪は見ると云ふ、名は異なるも體常に同じ、教は文字に即して、禪は文字を離る、禪既に是れ文字を立せずして、教外に別傳す、何ぞ復た心と説き性と説くを要せん、既に是れ直指人心、見性成佛なり、這箇の直捷簡徑若し心を起し念を動かして、討覓せんと要すれば、早く是れ迂曲にし了るなり、故に中峰云く、爾若し語言文字の上に於て計較論量せば、直捷簡徑ならざるのみならず、返つて箇の三家村裏の不學底の人、喫飯著衣の外に、却つて許多の枝葉なきが如くなるに及ばずと、蓋し意識を以て之を説くときは、千言萬語皆曲指なり、言下に旨を領して之を會するときは、築著

直指と簡

一〇
穢著盡く直指なり、經に云く、唯此一事のみ實にして、餘の二
は即ち眞に非ずと、此の一事と説くさへ猶ほ剩語なり、此外
何ぞ二の三のと蛇足を添え、佛性の一乗の頭上に頭を加
えて、重ねて黃面老子の憂を増さしむべけんや。

四

凡そ宗旨を會せんと欲せば、須らく一隻眼を具して、理會
なき中に於て薦取すべし、無理會とは何ぞ、世間相對的の智
識は甲乙對照比較を取つて判斷するの常則なるも、若し比
較を絶したるものに當るときは、普通智識は手脚を著るこ
と能はざるが、茲に至つて宗教は妙なもので、此無理會に手
を著け、一條の活路を開いて、吾人をして別天地に徜徉せし

冷暖自知
の佳境

むるを得せしむ、然れども心意を絶し水を飲んで、冷暖自知
する底の境界に到らざれば、決して絶對界の妙味を咀嚼す
ること能はず。

公案古則

古來公案古則の設けあるは、何の爲めかといふに、冷暖自
知底の佳境に達せしめんとするに外ならず、古人は文字言
句の間だに於て、一聞千悟して總持を得たるもの寡からざ
るも、今人は然らず皮に粘し肉に著いて、脱體現成すること
能はざるのみならず、往々文字言句の葛藤に固著して、蔓を
引き枝を繁くして漆桶不會、二進も三進も前むこと能はざ
るのみならず、退くことも亦能はず、今此の縛を脱する爲め

に公案古則を設けて其恩力に藉りて解脱の地に達せしめんと欲す然れども衆生障重く久しく塵勞に埋没せられて眞源に遠かるが故に今日出頭儻猛烈の志氣を鼓して一回寒さ骨に徹するの苦を経ずんば争てか鼻を撲つて香ばしき梅花を見るを得ん文字の音信に縁らずして家郷の消息を通ずる一條の線路は他なし祖翁の遺されたる鐵釘飯木札羹あるのみ然れども空疎なりと雖も實に吾家醍醐の珍膳なり兒孫今に至るまで飢へざるは只此の別傳の一昧である

五

即今吾人が目前に孤明歷々として萬般を照燭する底は

畢竟什麼ぞ面前の森羅萬象人畜草芥等眼を開けば見えるが眼を合するに何ぞ見えざる屋外點滴の落るは耳に入る窓前鴉鳴の譟くは耳に入る雨聲と鴉鳴と爾の耳根を穿ちたるは明かにして言端語端を絶して如何に見るか如何に聞くか鏡清和尚は衆生顛倒して己れに迷ふて物を逐ふと云はれた若し然らば即今己れに迷はず物を逐はざる底は如何ん意根に法塵を縁する乃ち是れ喜怒哀樂愛惡欲の七情は境に對すれば忽ち起り其境に對せざるとき之を何と名ぐる子思は七情の未だ發せざるを中と云ひ發して節に中るを和と云ふ未發の中とは如何ん既に是れ喜なく憂なき思想言語を絶したるものの中底果して如何ん吾人の心に縁じ境に對して情想が生ずる是れ什麼物か心は萬境に

不思議界

隨つて轉ずるは、悟者も迷者も變りはないが、轉ずる處實に能く幽なりとは是れ如何ん、箇は境界を得たものでない、直饒ひ説き得て妙なりと雖も、脱酒にない、姑く其轉ずるは則ち汝に許すも、實に能く幽なりは水を飲て冷暖自知底の境界に到つたものでないと、承當することはならぬ、是れが己れに迷ふと己れに迷はざるの分界である、迷者はいかに説明講述したりしとて、思議界知解の分際にして、不思議界解脱の分際に至つては、夢にも見ることも能ざるべし、且く道へ、即今坐底是れ什麼ぞ、立底是れ什麼ぞ、行くものは、是れ什麼住する者、是れ什麼ぞ、透者も末透者も均しく、是れ行住坐臥語默動靜にして、同じ事をして居るのちやが、其思議分際と不思議分際の相違は、天淵も亦音ならざるべし、夫れ斯の如

く一々見聞覺知の上に於て、仔細に看取するときは、必ず疑團の凝結するありて、其解結を求めんとする心切なるに至らん、是れを大法現前の兆候となす。

六

若し上の如くするも、妄念猶ほ紛飛すれば、一則の話頭を提撕して、造次頭沛にも生冤家に出逢ふが如く、主眼卓立して目さず敵と組み討ちする決心の臍を堅め、咬み去り来りて晝夜芒刺に坐するが如く、話頭と死を決して斃れて已まんのみ、僧趙州に問ふ、狗子に還つて佛性ありや、マタ無しや、州曰く、無、此の無字實に生死の命根を斬却する、太阿の劍である、擬議すれば、喪身失命す、只須らく當陽に擧拈して、

趙州の狗子佛性

有無の念に涉らず是非の心を起さず一意進前せよ、大慧云く、趙州の無字祇麼に擧せよ、無門頌して云く、狗子佛性全提正令、纒涉有無喪身失命と、無字を彼是れ云ふたら頭は飛ぶぞ、吾人も昔し退耕先師に東京麻布天真寺に従ふて、此無字に參じて如何ともする能はず當時越叟和尚伊達自得居士等に晤話の次で説破を乞ふも、他は点滴も施さず先師の室内では怒罵呵咄に逢ふて、數々打出せらるる後ち、一夕夢の覺るが如く、老趙州に謁するを得た、公案古則に依らなくとも、悟る者は悟り去るが、遲了八刻ちや、澆季は眼耳共に鈍劣にして、彼の一見桃花や、一撃所知を忘する底の根機は寡いから、入道の捷徑は看話擧則より好きはなし、虚堂云く、裏許に主宰なければ進むこと遅し、蓋し主宰とは古則を提げ胸

虚堂の裏許主宰

裏に懷抱して離さざるを謂ふ、敵討が一朝讎敵に出逢ふて主眼卓堅するが如し、裏許の公案と頸引きして、縦横に咬嚼し咬み去り咬み來りて、工夫純熟するときは、一朝咬破の劈頭公案に和して、證を取ることも猶ほ掌を反すが如くならん、千聖萬佛の出世開導も亦唯此事の爲めにして、轉迷開悟の要妙は之を捨て豈他あらんや。

七

看話を非認する論者は、動もすれば輒ち云ふ、曹溪に此事なし、六祖奚ぞ公案を拈提せしめんと、是は則ち是なりと雖も可惜許、曹溪に此事なきは姑く置く、末世人根鈍劣なる争でか達するを得ん、是に由て、五季宋初に方りて、第二義門に

看話非認

公案古則

下つて拈提古則の法盛なるに至るは、畢竟本意でないが、亦是れ一理なきに非ず。蓋し従上來の老漢機に臨み變に應じて、此段の大事因縁を會得せしむる手段萬般にして、方便も亦殊異なり。看話拈則、默照打坐、皆是れ應病與藥にして、但其病を除けば足るのみ、必しも定盤星を認むべからず、抑も靈山の拈華微笑、迦葉の刹竿倒却、提婆の鉢水投針等は、皆是れ公案にあらずや。特に唐末に至つて、百尺竿頭に歩一步を前めて、一千七百則の公案を出すに至るもの、亦是れ宗門の進歩發展と謂ふべきのみ。今人は佛祖を吞了する底の脱空掠虚大言壯語のみ吐いて、其實此事は毫も知らず、亦是れ迷中の倍人と謂ふべきなり。畢竟公案は敲門の瓦子、標月の指頭なれば、必しも何くまでも執著するを要せん。若し夫れ了

八

百當するに方りては、即心即佛も非心非佛も、不是心、不是佛、不是物も、亦是れ滿面の慚惶なるのみ。

昔者雪峰一日巖頭を率いて、欽山を訪はんと、鰲山店上に至つて雪に阻らる。巖頭毎日只是れ打睡す。雪峰は一向に坐禪す。巖頭喝して云く、瞋眠し去れ。毎日床上に七村裏の土地に似て相似たり。他時後日人家の男女を魔魅し去ることあらん。峯自から點胸して云く、某甲が這裏未穩在、敢て自から瞞せず。頭云く、我れ將に謂へり、爾已後孤峰頂上に向つて草庵を盤結して、大教を播揚せんと、猶ほ這箇の語話を作す。峰云く、某甲實に未穩在。頭云く、爾若し實に此の如くならば、爾

が見處に據つて一々に通じ來れ、是處を我れ備が爲めに證明し、不是處を備が爲めに剗却せん、峰遂に擧す、鹽官の上堂に色空の義を擧すを見て、箇の入處を得たり、頭云く此を去つて三十年、切に忌む擧着することを、峰又擧す、洞山過水の頌を見て、箇の入處を得たり、頭云く若し與麼ならば自救不了、後ち徳山に到つて問ふ、從上宗乘中の事、學人還つて分ありや、マタ無しや、山打つこと一棒して、什麼と道ふぞと、我れ當時に桶底の脱するが如くに相似たり、頭遂に喝して云く、備道ふことを聞かずや、門より入る者は是れ家珍にあらずと、峰云く他後如何が即ち是ならん、頭云く他日若し大教を播揚せんと欲せば、一々自己の胸襟より流出し、將ち來りて、我が爲めに蓋天蓋地し去れ、峰言下に於て大悟、便はち禮拜

徳山の二

口は是れ
禪門

し起ち來つて、連聲に叫んで云く、今日始めて是れ鰲山成道、今日始めて是れ鰲山成道と、咄吾が這裏は這般の閑伎倆を要せず、然れども大小大の巖頭老漢、雪峰の爲めに老婆心切なる斯くの如きものあり、此一節を見て、謂ふなかれ、悟の淺深、厚薄なしと、學道は一朝一夕では到られぬ、須らく千鍛萬鍊して、益す精中の精を要せよ、看話、是か默照、是か山僧口は是れ禪門、

悲 智

大乘佛教の特徴は悲智の二門に在り、小乗では自行涅槃を得る智を説くのみにして、大悲衆生を濟度するは其目的に非ず、故に彼聲聞根性縁覺根性の二乘は、利己主義に止ま

四弘の願

りて、衆生濟度は丸で棚に上げたも同様なり、基督教などは之と反對にして、智門よりも悲門を重んじて、情感的を主張するに似たり、大乘佛教は智力情感兩全を以てして、一方に偏墜せざるのみならず、四弘の願輪に鞭ちて進むに勇あり、勇猛精進忍辱耐苦を以て退かず、抑も智仁勇の三は缺くべからざるものなれば、世間何事を成すも皆同じ、而して彼心理學に所謂智情意の三は鼎の如く、具備しなければならぬが、大乘の上に於ては此三者何れが尤も切なるかといふと、吾人は情が一番大切なるものと謂はんのみ、开は佛陀の意は佛國土を淨め衆生を成就すといふことに、尤も重きを置くが故なり、佛國土を淨むと云ふは、他語以て之を言はば、世界を平和にし國土を安寧にすといふこととなるなり、此の

三智情意の

佛の目的を達せんが爲めに、智を研き、行を起すこととなるから、情が先きになる、然しながら智なきの盲情は、到底人を濟度すること能はざるが爲めに、智力の養成を要せざるべからず、智門より悲門に移るは濟度の順序なり、故に洞山は無中に路あり塵埃を出づと云へり、無相平等の中より躍り出で、大悲願海湧くが如く、慈を興し悲を運らし、衆生の爲めの故に塵埃に出るは、是れ菩薩の誓願なるが故に、四弘願の初めにも衆生無邊誓願度を置けり、順序を言はゞ先づ己れ達して、而して後ち人を達せしむるが次第なれば、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成の後ちに於て、衆生無邊誓願度を置くべき筈なりしに、衆生無邊を劈頭に置きたるものは、佛陀の本誓は自度より寧ろ利他に在ればなり、

然れども十方世界普く一乘平等の法雨に潤はしめんとす
 る爲めには、自行も亦修せねばならぬ、盡るなき煩惱の根柢
 を斷盡せんと勇み、量りなき法門の奥蘊を學得せんと進み、
 佛道の大覺を成就せんと誓ふも、畢竟利他の爲めのみ、要す
 るに觀音の大悲を成就せんか爲めに、文殊の大智と普賢の
 大行を成就すといふの結論に歸するのみ。

九

佛。陀。濟。世。の。目。的。は。願。を。以。て。本。と。爲。す。願。力。深。重。な。れ。は。一。
 切。の。事。業。皆。此。願。に。集。中。し。て。大。悲。苦。を。拔。き。樂。を。與。へ。ん。と。す。
 る。力。尤。も。勝。る。が。故。に。天。魔。外。道。も。之。を。破。壞。す。る。こ。と。能。は。
 ず。此。の。大。願。を。成。就。せ。ん。が。爲。め。に。自。か。ら。煩。惱。を。斷。じ。法。門。を。

學得して、佛道を成就するは佛教の大綱なり、而して菩薩は、
 是を以て究竟と爲さず、進んで願輪に鞭ちて生々世々菩薩
 行を修す、夫れ大悲は無邊なり、衆生も亦無邊なり、無邊の大
 悲を以て無邊の衆生を度せんとするなれば、不可量不可稱
 にして邊際あることなし、譬へば、虚空の邊際なきが如し、無
 邊の虚空を究盡したと云はゞ、此の處りあることなし、盡る
 なき煩惱を盡したと云はゞ、此の處りあることなし、無量の
 法門を我れ學び盡したと云ふも、亦此の處りあることなし、
 何に況や無上佛道を成就したなど云ふは以ての外の事な
 り、佛道修行は卒業の期とてはない、釋迦彌陀も今猶ほ四弘
 願輪に鞭ちつゝ修行最中である、故に雪竇明覺大師云く、如
 今黃頭老を見んと欲すれば、刹々塵々半途に在りと、在半途

の三字を看熟了せねば、雪竇の眞意を謬解するぞ、而して今
 ま吾人も亦四別願あり、第一に願くは決定して見性せん、第
 二に願くは大法を荷擔して人情の爲めにせず、第三に願く
 は身を犠牲に供して塵刹に奉ぜん、第四に願くは佛國土を
 淨めて衆生を成就せん、此の四別願は人々分に應じて成就
 せんことを誓ふべし、若し之に反するものは、爾自から小乘
 の窠窟を設けて身を其中に埋めんとするなり、如是の心志
 ならば、縱然ひ春日神社に詣て、參籠すとも、明神の御對面
 は叶ふまじ、勉めん哉利佗行。

十

四弘誓願文四句二十八字は經文でない、止觀大意に出て

春日明神の御對面

四弘誓願の

積極的と消極的と

たるものなれども、萬古不變の眞理を含んで、三世諸佛の本
 懷を叙盡し、廣大圓滿雄渾偉大、其橫幅の廣いこと測るべか
 らず、其奧行きの深いこと窺ふべからず、斯る尊い語は外に
 はあるまいよ、聞くたび毎に有難く感ずるは、此四弘誓なり、
 古句に「杜宇いつも初音の心地こそする」と、衆生無邊等の四
 弘誓願文もほととぎすなり、いつ聞いても珍らしく初音の
 心地するは、是れ何の緣由ぞ、箇は菩薩同體の大悲誓願は、衆
 生の爲めに多生曠劫に亘りて、常に無邊なる衆生を度し盡
 さんと、積極的に勇める活氣横溢してあるから、ちや、彼衆生
 は兎もあれ角もあれ、我れ獨り涅槃に入らば萬事休すと云
 ふ消極的小乗とは、天壤の相違で、大乘はいつも衝天の活
 氣ありて、聞くものをして踴躍歡喜の心に堪へざらしむ、其

三六
答。ち。や。前。佛。も。後。佛。も。之。に。由。つ。て。正。覺。を。取。り。給。は。さ。る。は。な。き。が。故。な。り。故。に。經。に。は。大。悲。に。依。る。が。故。に。恒。に。衆。生。を。緣。じ。大。智。に。依。る。が。故。に。常。に。法。性。に。如。ふ。と。云。へ。り。法。性。に。如。ふ。と。は。智。な。り。智。あ。る。が。故。に。生。死。煩。惱。の。世。に。住。せ。ず。衆。生。を。緣。ず。る。は。悲。な。り。悲。あ。る。が。故。に。涅。槃。寂。滅。の。樂。に。住。せ。ず。大。悲。以。て。之。を。挽。き。大。智。以。て。之。を。推。し。一。乘。の。大。白。牛。車。が。露。地。に。遊。戯。し。衆。生。を。濟。度。し。て。窮。盡。あ。る。こ。と。な。し。と。云。ふ。は。諸。佛。の。大。悲。誓。願。で。あ。る。

十一

中峰云く、心念主なし染淨縁に随つて、一刹那の間變化萬狀道に之かざれば則ち業に之き悟に之かざれば則ち迷に

之。く。曷。ん。ぞ。止。む。こ。と。あ。ら。ん。や。と。抑。も。佛。の。大。悲。な。る。も。の。は。唯。是。れ。衆。生。の。心。地。に。根。し。て。起。る。所。の。も。の。に。し。て。衆。生。な。く。ん。ば。止。み。な。ん。苟。く。も。衆。生。あ。れ。ば。佛。の。大。悲。は。常。に。其。感。に。赴。き。縁。に。應。じ。て。慈。愍。の。眼。を。注。ぎ。救。濟。の。手。を。垂。れ。て。攝。取。す。彼。の。衆。生。は。其。善。惡。の。業。に。由。て。因。果。の。尅。す。る。處。一。旦。報。縁。忽。ち。盡。き。な。ば。業。何。ぞ。逃。る。へ。き。道。に。之。か。ざ。れ。ば。即。ち。結。業。に。之。き。一。念。の。反。覆。に。由。て。善。惡。苦。樂。千。狀。萬。態。實。に。驚。く。べ。し。汝。を。し。て。如。是。の。業。果。を。感。ぜ。し。む。る。も。の。は。他。人。に。非。ず。し。て。汝。が。一。念。に。在。り。汝。を。し。て。地。獄。門。頭。に。罪。狀。の。責。め。苦。に。遭。ふ。て。呵。責。す。る。も。の。は。閻。魔。に。非。ず。し。て。汝。が。一。念。に。在。り。汝。が。一。念。三。業。を。愼。み。六。根。六。塵。に。染。著。せ。ざ。れ。ば。業。果。の。結。ぶ。べ。き。な。し。佛。云。く。汝。を。し。て。生。死。に。輪。轉。し。て。根。を。結。ば。し。む。る。は。唯。た。汝。が。六。

根にして更に他物なし、汝をして速かに安樂解脱寂靜妙常
 を證せしむるも、亦汝が六根にして更に他物にあらずと、佛
 の大悲は縁なきものを度せず、直饒ひ縁あるも無暗みに苦
 を抜き樂を與へるものに非ず、能く汝が心地に根して拔苦
 與樂の原因を治せしむるのみ、夢に七珍萬寶を得て覺めて
 後ち啞然たる如きものに非ず、佛は唯是も三界の凡夫が迷
 妄の根元を見て、爲めに一乗の法門を説く、其一乗も亦是れ
 門外より入り來りたるに非ずして、汝が一念眞理と相應す
 るときは圓頓一乘は汝が鼻孔上に在り。

十二

摩訶般若

大悲願心とは唯た佛のみにあらず、鬼も亦涙あり、心地觀

經の序品に云く、復た百千の琰魔羅王あり、無央數の諸の大
 羅刹種々の形類及び諸の惡王幽冥の官屬罪福を校計する
 獄吏刑司と佛の威力を承けて惡心を捨離し、琰魔羅王と同
 じく來つて法を聽いて佛に白して言く、一切の衆生は愚痴
 を以ての故に、五欲の樂を貪はり、五逆の罪を造つて、諸の地
 獄に入りて輪轉窮まりなし、自業の因する所、大苦惱を受
 く、世の蠶繭の自から榮纏を爲すが如し、唯だ願くは如來大
 法雨を雨らし、地獄の火を滅し、清涼の風を施し、解脱の門を
 開き、三惡趣を閉ち給へと、罪囚を管領する琰魔王聽ては、罪
 人の投獄を歡迎すべき筈なるに、決して爾うてない、同情の
 涙は魔王の袂をも濕ほす、今ま琰王の佛に對つて、罪囚の滅
 ずるを請願するを見れば、同體の大悲心は地獄の中にも満

大悲苦に代る

ちてある。叫喚焦熱の燄を滅して、慈悲清涼の風を施し給へ。と、是れが誠に大悲苦に代つて濟度し給ふ佛菩薩の御心である。衆生は六根に由て罪垢を造り、五欲の樂を貪ぼり、五逆の罪を造りて、自業の因する所る輪轉窮あるなく、大苦惱を受るが故に、濟度して遣らねばならぬ。之を要するに業にくもものを引導して、悟に之かしまるは佛祖の本願である。

薄塵一味

三三

十三

心地觀經に云く、三界の中には心を以て主とす、能く心を觀する者は究竟して解脱す、觀すること能はざるものは究竟して沈淪す、衆生の心は猶ほ大地の如し、五穀五果大地より生ず、是の如き心法は世出世の善惡五趣有學無學獨覺菩

因果は影ふが如し

薩及び如來を生ず、是の因縁を以て三界唯心なり、心を名けて地と爲すと、須らく知るべし、善因は善縁に由て善果を招き、惡因は惡縁を誘ふて惡果を結ぶ、法華には如是因如是縁、如是果如是報とあり、因縁果報は影の形ちに隨ふが如くして、決して離るべからざるものなり、一念の惡心は已に地獄を生じ、一念の善心は既に天堂に生ず、因果彰然、鏡に對して己が像ちを見るが如し、實に因果の離るべからざるを知るときは、果を略して因を慎むべし、彼盜賊の頸を斬るものは、刑場の白刃に非ずして、庫中の黄金なり、庫中の黄金は盜賊の甘んじて斬らるゝ所なり、彼盜賊をして黄金を懼るゝことと白刃を懼るゝが如くならしめば、何ぞ己の身首處を異にするに至らんや、所謂因を忘れて果を願ひ、果を懼れて因を

刑場の白刃と庫中の黄金

薄塵一味

三三

輕んずるものなり、善因善果を生ずるも亦餘り、善果を希はずして先づ善因を植ゆべし、善因已に植れば善果は求めざるに至る。近日の美事として傳へらるゝ吾邦に來朝の歐米觀光團の一婦人が、太平洋中誤つて海中に陥る刹那、一英人年十七躍つて水に入りて、婦人を救ひ上げたれば、船中皆賞美せざるはなし、大阪府慈善財團部では、該船の神戸着岸を見るや、青年の勇敢を賞するに、貴重の物品を以てせしと云ふ、彼身を犠牲に供して投海の一念は、求めざるに受賞の善果を招く形影の如し、故に人々脚下を照顧するを以て第一となすべし、徒らに菩提涅槃の妙果を願ふたとて、自から身口意善ならざれば、妙果豈に期すべけんや、妄因の初めを閉れば、妄果の來るべきなきも亦同じ、嗟、衆生は六根因縁の境

に陥りて、七情利害の場に奔り、因果の尅する處、善惡の果報を受く、皆是れ身口意の情を恣にするより起らざるはなし、是故に其始めを慎ましむべし、惡趣の門を閉るは己が三業より始まる、此外別に妙訣なし。

十四

智門は大聖の自受用法樂にして、復た是れ衆生本具の佛性なり、世尊成道普く法界の一切衆生を觀て、是の言をなし給ふ、奇なるく、此の諸の衆生は、云何ぞ如來の智慧を具無しながら、愚痴迷惑にして知らず見ざる、我を當に教ゆるに聖道を以てして、其をして永く妄想執着を離れて、自から身中に於て如來廣大の智慧は、佛と異なること無きを見るこ

とを得せしむべしと、是れが華嚴の如來出現品ちや、如來が
 出。現。し。た。ら、妄。想。の。執。着。の。と。い。ふ。は、一。溜。り。も。あ。る。も。の。で
 ない、凡夫の妄想は丸ごかしに佛の智慧である、凡夫の執着
 は取りも直さず佛の徳相である、正眼に看來れば焦熱の黒
 酸も、餓鬼の飢渴に泣く苦みも、即ち是れ佛の知見である、佛
 光云く若し此の妄想を去りて、別に智慧を求め別に證入を
 求めば、宛然として生滅の斷見なりと、面白いことちや、妄想
 の妄は字書に誣なり誕なり罔なりと云ひ、説文には亂なり
 とある、要するにミダリと訓して、誣ひたり誕つたり、好いの
 悪いのと妄計し邪推して、六根門頭に迷妄の解釋をつける
 を云ふ、想は思なり字彙に意之く也とあり、意思の之く處花
 にも月にも、人にも物にも、意想の動いて之く處が持ち前で

ある、五蘊中に想蘊あり、想は字相の下に心を附す、尙且心に
 相を取りて思ふことちや、彼人が今朝來つて我れに何に何
 にの事を尋ねたとか云ふたとか思ふと、直に連想して其人
 相が目先きにつくは皆想なり、一切諸法に於て想蘊の到る
 處速かなり、喩へば今爰に千仞の峻崖より飛び墜ちなんと
 假定する時は、直に深谷の相が心に形はれて、足心が戰慄す
 るが如きは、皆想である、佛教には情想と熟字して、妄情の動
 く處に妄想が現じて、種々に心界を煩惱惑亂し、眞智を覆蓋
 して見ることも能はざらしむ、是れ皆境に好醜憎悪あるに非
 ずして、自心の愚痴迷惑より出づる妄想である、

般若如火
聚の如し

衆生に在ては妄想ちやが佛に在ては智慧である、抑も如
 來の智慧とは是れ什麼ぞ、固より心意識情を以て解釋する
 限りでない、須らく大死一番底の大悟を経て、飲水冷暖自知
 底に至つて、始めて承當するを得べし、般若は大火聚の如し、
 四面近傍すべからずとは、則ち眞智の之に向はんとすれば、
 乖く、説似一物即不中底の般若の體を比喻したものである、
 火聚は何にも觸られぬものでもない、火渡りの幻術もあり、
 火を食ふ鳥もあるから、近傍できぬ譯ではない、箇は只是れ
 心の之を瞻るに前に在るかとするれば、忽焉として後へに在
 りといふ如き、捕捉すべからざる心を云ふたものと見るが
 よい、扱て般若の大智が手に入らぬと、生死界に入つて衆生
 を濟度することが能きぬ、何となれば己れ自から縛ありて

は、人の縛を脱せしむることができぬ、是故に菩薩は衆生濟
 度の爲めの故に佛道を成就して、而して佛道の悟りに住着
 せず、一點無縁の大悲心を煥發して、生死界に還來して、四弘
 の願輪に鞭ち苦海の船筏となりて、度生の本誓を果すべし、
 之を名けて悲智圓滿と謂ふ。

三 德

三德といふは斷德智德恩德にして、皆是れ吾人具有の智
 慧德相である、佛の出世必ず此三德が顯はる、故に經に云く、
 破有法王出現世間隨衆生欲種々説法と、此の破有法王とは
 即ち斷德なり、衆生の欲に隨つて種々に法を説くとは、衆生
 の欲が佛の智慧である、恩德である、面白いことぢや、而して

毛劍の吹

心地觀經には大斷德を擧げて、二空の顯はす所ろ一切諸佛
 悉皆平等と云へり、斷德とは佛所證の理を體とし、諸惡を斷
 盡し湛々として慮を絶し、寂々として名斷るを云ふ、佛教で
 は斷ずるをば劍の德に比す、彼太阿の名劍を提げて、煩惱を
 一刀下に斬つて兩斷するの働きは、大斷德である、此の劍と
 いふも外にあるのではない、即ち是れ吾人の心ちや、一寸觸
 れたら輒ち斬れるといふ吹毛劍が出ると、人我も法我も粉
 碎せられて痕跡だも残らぬ、是れが自性身の斷德である、神
 道には此德を標じて劍となす、草薙の御劍は熱田神宮の御
 神體である、劍の力用は廣い、唯た姦邪を截斷するのみなら
 ず、天下を平定するも亦劍である、楚の項羽初め劍を學びし
 が、措大漢で甘く擊劍の術を手に入れなんだて、屢々項梁

殺活二劍

に叱られた、流石の英雄ぢや、其答に云く、劍は一人の敵學ぶ
 に足らず、願くは萬人の敵を學ばんと、言鋒一たび口を出
 と、此の如く斬れる、是れ亦舌劍の利用と云ふべし、劍は必し
 も人を斬るを以て能となさぬ、故に神武不殺と云ふ、禪では
 殺活二劍と稱するも、二振りの劍あるのでない、殺す刀で直
 に活かして、殺劍が即ち活刀である。

十六

臨濟は殺父殺母殺阿羅漢、出佛身血、焚傷經像の五逆罪を
 擧げて、無明の父を殺し、貪愛の母を害すと云ふ、即ち是れ殺
 人劍である、十方世界に土一、穢めもない、大地に蟻の鬚一本
 も遺さぬと云ふは、自殺にして、佛に逢ふては佛を殺し、祖に

自殺と他

逢ふては祖を殺すと云ふは他殺である、自を殺し他を殺したる當體を人空と謂ふ、一切經は不淨を拭ふ故紙、一塵一法も見ざるを法空と謂ふ、佛光國師が元兵侵入して、白刃頸に加へんとする時に、珍重す大元三尺の劔、電光影裏に春風を斬ると云はれて、神色自若たりしは、人空法空に達するに非ずんば争でか能く斯くの如くならんや、貴ぶべし。

十七

天下の不平を治める爲めに、劔は匣より出づ、治に居て亂を忘れてはならぬ、靈界の不平を平ぐる爲めに、殺人刀を揮はねばならぬ、法身の斷徳は實に是れ法の所依止である、扱此斷と云ふことは難いことで、煩惱障は斷じ得たるも、所知

所知障

障は中く、容易でない、故に最初八識心田に向つて、一刀を下すとき猛烈に斬り込まぬと、無始曠劫の無明煩惱が斷じ切れぬ、ゾコで勇進して無明煩惱の賊と戦ひ、一斬一切斬、斬り盡して身を留めぬといふに至つて、始めて八萬四千の魔軍も兜を脱いで吾軍門に降参して來るのである、勇猛の衆生は成佛一念に在りとは、茲ちや、太公望云く、斷ずべきに當つて斷ぜざれば却つて其禍を受くと、佛道修行も亦然り、大死一番峻崖に手を撒して、絶後に再び蘇へる底の時節に至らぬと、斬れ味が善くない、佛光國師は一晝夜も入定、全く死人と同じかりしと云ふ、其五更の鐘聲を聞いて豁然大悟した、投機偈に云く、一槌擊碎精靈窟、突出那吒鐵面皮、兩耳似聾口如啞、等閑觸著火星飛と、古人は死する時は充分死に切る

から復活も亦速かである、吾が武士道に賞揚するのは此決
斷力である、一旦斷じた已上は動かぬといふ武勇があれば、
撥亂反正必ず勝利を得ること疑いあるべからず、要するに
精神界の安寧は、一に此法身の斷德に由て、大安心、大安樂を
得らるゝものなれば、進んで大斷德を手に入れよ。

十八

大智德とは修因得果の極は、人々本具の佛性光輝を發し
て、圓滿なるを報身といふ、報とは果報にして身とは衆集の
義なり、果報身とは智聚圓滿なるが故に名けたり、所謂眞常
無漏とて、眞實常住に缺漏なきは一切の諸佛の證得し給へ
る德にして、前佛後佛悉皆同意なること、恰かも印判で捺し

一切諸佛
平等同一
意

無始無終

たるが如く、千篇一律同得同證なり、其智光愈よ明なるを圓
滿報身、盧遮那佛と云ふ、古人云く、智德は佛能證の智を體と
なし、我法の名を泯じ、圓滿の智を證し、淨妙の德を具するを
大智德と云ふと、人々の佛性も磨けば磨くに随つて光り耀
く、盧遮那報身とて外に求むるでない、彌太も平太も修得の
極は圓滿報身ちや、前の斷德には一切諸佛悉皆平等とあり
て、爰には一切諸佛悉皆同意と云へるに、著眼せねばならぬ、
法身は毘盧遮那遍一切處と稱する、普遍身なれば、蔭日向な
く、人畜草芥を首め地獄のドン底まで、隙間なく照り耀き、一
切の相を離れ、諸の戲論を絶じ、周圍無際にして、凝然常住と
いふは、法身の體である、是を無始無終と云へるは、上は妙覺
果滿の佛より、下は地獄の衆生に至るまで、差別はない、故に

平等と稱するなり、然るに報身は有始無終と稱せり、始得の眞身を有始といひ、永劫盡きざるを無終といふ、初め正覺を成じて未來際を窮めて、諸根相好法界に周遍して、四智圓滿なる當體は、諸佛皆同意である、是れも人々四智圓明に進趣しつゝ、行く當體を云ふたのちや、意の一字尤も智身を顯はす深く翫味すべし、此所は看經の眼を具せぬと、平等と同意を混同して、味噌糞一つになすと蹉過了するから、注意せねばならぬ。

十九

報身には自受用と他受用の二つがある、自受用とは佛身受用の智徳法樂にして、是れ四智なり、其他受用とは佛神通

を現じて法を説き、他をして法樂を得せしむるを謂ふ、是れに後報利益現報利益といふことがあるは、心地觀經を拜見するが可い、此眞報身に眼の著け處は、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四智である、神道では此智徳を神聖なる寶鏡と崇め奉れり、厥初めは皇祖親しく八咫鏡を皇孫瓊杵尊に授けて、此鏡は我が御魂と爲して、我を齋くが如くして祭れと宣給へり、取りも直さず寶鏡は皇祖天照大御神の御神體と異なることなし、神體即ち鏡體なれば、心地觀經に云へる自受用身と符合して、而して寶鏡の外に向つて照し給へるを、他受用と稱すべし、乃ち同殿同牀に坐して齋祀せよ、天津日嗣の隆昌は天壤とともに窮まりなしと宣給へるは、他受用に當れり、我が不言の神教と默契せる、廬遮那報身

の果徳は、神と云ひ、佛と云ふ、豈他に求むべけんや、儼が一念清淨の心體、即ち是れ遮那の鏡體なり、鏡とは什麼ぞ、道心の本體法界を照了して、赫々たる大智徳は即ち是れ鏡なり、鏡なるものは鑑るなり、明かなり、明かに鑑みて萬物を照す、吾人の靈光不昧なる自性は即ち寶鏡なり、所謂寶鏡三昧と云ふも、亦唯だ此自性の智鏡が、天地萬物を寫して、回互映顯するを云ふなり、智の徳たる明なり、般若の眞智一たび出るときは、光明漫々大千を照らして、至らざる所なし、而して智とは物に凝滯せずして、活潑流動するが故に、孔子は智者は水を樂むと云ふ、樂の一字、快濶流暢、雅量宏度なる智者を代表して、妙甚だし、吾國體の尊嚴なる智鏡上に懸りて、四海を鑑し、聖徳天の如く、萬古を照し給ふ、智徳の至れるに非ずんば、

寶鏡三昧

智者は水を樂しむ

安んぞ能く斯の如くならん。

二十

大恩徳とは定通變現、一切諸佛悉皆同事とありて、是れは佛身の普ねく物に應同じて、惠澤を施與するを云ふ、前の自性身の斷徳及び報身の智徳は高きに過るが故に、衆生に接近すること能はず、此の應身の恩徳は和氣春の如く、一般社會に福音を及ぼし、直接に慈光に接せしむ、古徳云く、恩徳は佛の大慈悲を體と爲す、自佗の念を離れ、衆生の苦を抜き、解脱の樂を與ふるを大恩徳と名くとありて、所謂觸光柔軟の慈悲は至らざる所なく、動物界にも及ぶ故に、亦之を異類中行とも云ふ、乃ち是れ番々出世の佛は和光同塵とて、凡夫と事

異類中行

五〇 所謂喬木を
 を同ふし、社會と業を共にして濟度するを謂ふ、所謂喬木を
 出て幽谷に下りて、化を垂るゝ同事業は、三世の諸佛皆同じ
 く千篇一律である、斯うなければ種々の階級に化を及ぼす
 ことが能きぬ、自性身には平等と云ひ、報身には同意と稱し、
 變化身には同事と呼ぶ、文字の排列對照一々三身の肯綮に
 中りて動かすべからざるは、一隻眼を具するに非ざれば見
 徹透し難からん、抑も釋尊の八相（托胎出胎納妃出家降魔成道轉法輪入涅槃）成道と
 いふは全く應身の同事業である、今後彌勒が出ても亦同じ
 事を繰り返へすに過ぎざるなり、蓋し衆生の感に赴き縁に
 應同するは、變化身に非ざれば衆生と共に事を成し遂るこ
 と能はず、譬へば天皇は親しく臣民に接し給ふことはない、
 必ず宰臣官僚以下に命して接せしむるが如し、宰輔即ち變

化身で千手千眼を將て、普天率土隈なく王化に漏れざらし
 めんことを要するは、應身如來の如くである。

二十一

應身の化益約いて、冥顯二益となす、冥益とは則ち普門品
 に七難（水火羅刹刀杖鬼枷鎖怨賊）を免れて貪瞋痴の三毒を離れ、二求（福德智慧）
の男と端正有相の女を得せしむるを謂ひ、顯益とは應に佛身を以て得
 度すべき者には、即ち佛身を現じて法を説く等より、乃至天
 龍八部に至るまで、皆機に應じて法を説く、三十三身十九説
 法にして、千手千眼大悲の利益は、三界萬靈有縁無縁に亘り
 て化度せざるはなし、應身如來と云へば佛身であるが抹香
 臭い處にのみあるのでない、應同の身であるから到らぬ限

もない、乃ち佛教の臭味を離れた處に、佛身充滿して却つて佛殿裏に埋りて居る處には、光明が放たぬ、兎角現時常見の徒輩は、佛教臭い文字言句儀式形相に囚はれ、圓頂方袍ならば皆家裏の親に思ひ、金銀泥像ならでは佛像に非ざる如くに思ひて、豈に圖らんや、市井熱鬧の眞只中に佛身光り輝き、瑛王廳内に正法を演説するあるを知らず、是を邪見と謂ふ、金剛經には若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、是の人邪道を行じて、如來を見ること能はずとは是なり、此の應身親しく物に接して濟度するは、劍の銳鋒なる鏡の明煌なると異にして物と春をなして化するは、神道には瓊の徳に形りて、八尺勾瓊の玉と云へり、瓊の徳たるや、含潤溫藉霽然たる和氣を物に及ぼす、故に社會の缺欠を補ひ、鰥寡孤獨

常見の誤

恩徳の和氣

貧苦不幸の民を賑恤する、種々慈惠の恩典は瓊の徳に比すべし、孔子云く、仁者壽しと、博愛民に及ぼし悠久物を成すといふは仁の徳にして、其温たかき慈愛は、母の一子を懷中に乳養するが如く、神佛聖人の衆生に蒙らしむるの仁徳も、亦是の如くして至らざる所なし、而して此斷智恩の三徳は實に人々の具有にして、操れば則ち存し、舍れば則ち亡ぶから、操らねばならぬ、恒に性珠を研き、靈劍を撫し、古鏡を拭ふて、以て本光を現はすべし、思益居士云く、萬法は唯心の所現なり、故に心の外に神明なく、心の外に佛陀なし、福を祈るも汝が心なり、福を與ふるも亦汝が心なり、苦を招くも汝に在り、樂を招くも亦汝に在り、人々何故に吾心の神明上帝佛陀なるを思はず、却つて他の上帝鬼神佛陀を假想捏造し、又之に

神明佛陀上帝も皆吾心なり

托して福を求むるや、一心を取つて之を陶し之を冶し、假を去り眞を存し、妄を除き實に就き、工夫鍛錬其道を失はずは、大にしては大覺、小にしては小覺、淺にしては上帝鬼神、深にしては佛性涅槃、欲するに任せ得ざるなく、又何ぞ恐怖卑屈して外物の蠱惑を受けんと、臨濟云く、學道の人且く自信を要せよ、他に向つて覓むることなかれ、爾が一念心上の清淨光は是れ爾が屋裏の法身佛なり、爾が一念心上の無分別光は是れ爾が屋裏の報身佛なり、爾が一念心上の無差別光は是れ爾が屋裏の化身佛にして、此三種身は是れ爾が即今目前聽法底の人なり、祇だ外に向つて馳求せざるが故に、此功用ありと、明々に説示して遺す所なし、經論家の三身では兎角死句に落ちて了ふが、衲僧が黒眼で照しぬくと、此三種身

臨濟の三種身

が活きて來る、三徳も亦然り、死句下に薦取すれば自救不了である、此輩宜しく臨濟の劔を將て、報化佛頭を坐斷せば、屋裏の三身も亦光りを放つなるべし。

轉迷開悟

宗教は必ず此一章を缺くべからず、所謂宗旨の生命といふは轉迷開悟である、正眼に看來れば至道無難、轉ずべき迷いもなければ、開くべき悟も有るべき筈はない、然れども此悟由といふ一事は、明白なる事實にして、瞞肝儻侗すべからざるあり、分明に迷あれば、分明に悟あり、故に龍牙云く、學道は須らく悟由あべし、還つて曾て快龍舟を鬪はすが如し、然れども舊と閑田地に攔くと雖も、一度羸ち來つて方に始め

學道は悟由からず

て休すと、閑田地に閑く快龍舟ちやで、餘り平生は間に合はぬから、ドウでも可い様ぢやが、爾うは往かぬ勝軍の快龍舟ならでは、價值がない、是非とも悟らねばならぬ、悟つた後はドウするかと云ふに、一休云く、悟りなば坊主になるな、肴食へ、地獄に入つて鬼に負けるなと、鬼を手先きで使ひ廻はす様な悟りでないと、役に立たぬぢや、尋常教中には轉識成智として、凡夫の八識を轉して、佛の四智を得せしむと云ふが、此篇も、語便に隨つて、已下、轉識成智の目を以てす、要するに、轉迷開悟より外ならず、聖に在ては大圓鏡智と名け、凡に在つては八識と名く、智と識との分界迷悟を明かにして、轉凡成智事豈に輕忽にすべけんや、禪門では初めより不立文字で、教の外に別傳して、一大藏經も此の之乎者也に過ぎずと

一休の地獄で鬼を使ひ廻すに

遠慮の感
辣手段

喝破して、輪廓外に放ち去て取らず、然れども所謂直指人心見性成佛と云ふことは、取りも直さず轉迷開悟である、轉迷開悟と云へば語氣軟弱であるから、達磨は直下に見性成佛と斬り込ましむ、此惡辣手段でない、中々魔軍と戰ふて煩惱の賊を生擒することが能きぬ、先づ初めは趙州の無字に參するが可い、晝夜無字三昧になり切りたるは、是れ既に一刀を阿頼耶の心田に下したるものなり、扱て大悟徹底の後には、悟後の修行に至つては、幸與修多羅合を要す、乃ち心地觀經の轉識成智に照して矛盾せざるを以て、古教照心の指南と爲すべし、經を以て信縁として、己が實證如何を修多羅に徵せざれば、或は邪路に陷るの恐れあり、古來の禪者は教より入るもの多きが故に、此弊に墜ちざるも、輒近盲修瞎練

盲修瞎練

五八
の徒、往々、外道邪師の部屬に誑惑せらるゝは、古教照心の規
轍を踏み、迹したるより起るなり、慎まざるべけんや。

二十一

阿頼耶を轉して大圓鏡智となす
禪門で、八識心田に、一刀を下すと云ふを、教中では、異熟識
を轉じて、大圓鏡智を得と云へり、大圓鏡智とは阿頼耶を轉
却したる、當下に證する所の智慧にして、如是如來鏡智の中
に、能く衆生の諸の善惡の業を現す、是の因縁を以て此智を
大圓鏡智と名くとありて、乃ち自己の心鏡一たび開發する
ときは、光明漫々として、十日の遺照なきが如し、是を大圓鏡
智と云ふ、異熟識といふは阿頼耶の別名にして、此識現生所
作の因が、異世に其果を成熟するが故に異熟といふ、蓋し吾

上天の載
無聲無臭

人の業が過去現在未來の三世に貫聯して、而して前生所作
の因皆善なるが如きは、則ち現世其福報を受く、所作の因不
善なれば、則ち現世其惡報を受く、又今世所作善惡の因同じ
からざるが如きは、則ち後世に善惡の果報を成熟するも亦
異なり、是をこれ異熟と謂ふ、元來阿頼耶識は言語道斷心行
處滅の當體にして、吾人の認識已上に在りて、思慮分別を狹
むこと能はざるものなり、孔子曰く、聲色の以て民を化する
に於るや、末なり、詩に曰く、徳の輶きこと毛の如しと、毛は猶
ほ倫あり、上天の載は聲なく臭なし、至れる哉とは至言なり、
夫れ無聲なれば聞くに由なし、無臭なれば嗅くに由なし、手
脚を挾むことならぬ、此物誰か之を把捉するものだ、故に至
れる哉と讚歎して筆を擱く、孟子に至つては、遠路に手掛り

孟子の盛
心知性

單刀直入
蓋に闔を
開す

をつけて、其心を盡すものは其性を知る、性を知れば天を知ると云ふは、稍婉曲にして徑路を辿ることを得せしむ、所謂憎い可愛いと形はれ来る心は把ることが出来る、故に其憎い可愛いを究盡すれば、性源に達して上天をも知ることを得と云ふ意ぢや、扱て此性は言語道絶へ思慮縁泯じて、朕迹を留めざるものなり、如何にして主人公の消息を傳ふるものぞ、這裏に至つて一線路を通じて、此心田に向つて一刀を下し得ると云ふ禪家の手段は、尋常教眼より詠むると、餘り無鐵砲で危険でないか、盲修瞎練では有るまいかと、疑惑を懐かるるあらんも、其杞憂は無用の事に屬して、此の安排が吾人は誰か知らん、遠き烟浪の外に好思量ありと云はん、とす、別々單刀直入、蓋に闔を排して進み、親しく主人公に相見を得せしむるは、別傳家の特色である。

二十三

阿頼耶を、含藏と翻ずるは、染淨同源、生滅和合と謂ふて、諸法を含藏して一切法の根源となるを以てなり、而して其染分は無明を本として、八萬四千の煩惱塵勞を具足して、業識を潤ふし、地獄等の苦果を感ずる、根元も無明からちや、若し又淨體を以て之を言ふときは、則ち本覺心源念を離れて清淨とありて、一點の風波も起たぬ、眞如海が八識の淨體ぢや、斯の如く染淨の二を具有し、佛凡一體善惡混同の藏識なれば、佛魔の總問屋であるが、扱て此識を轉じたるときは、大圓鏡智と成りて、衆生の諸の善惡業を現じて、善惡妍醜掩ふこ

佛魔の總
問屋

と能はざらしむ、地獄に在ては淨玻璃の鏡と現はる、即ち人の心性ちや、其心性一たび開悟すれば、如來の大圓鏡智である、如是の鏡中には悲智の二法を具足して、大悲あるが故に涅槃に住せずして、恒に衆生の苦を抜き樂を與へ、大智あるが故に生死に住せずして、常に法性に如い自受用法樂を受く、此識を轉せぬ間だは聖智を得られぬ、尋常悟つたとか解したとかいふ位の分際では、依然として業識茫茫たる迷妄の衆生である、然れども、一朝靜極まりて、光り通達するに至つて、還り來つて、世間を觀れば、生死涅槃は猶ほ昨夢の如し、大圓鏡智何くに在る咄。

二十四

末那識を轉じて平等性智を得るとは、末那は意と翻す、此七識末那は定つた體はない、第八識の染分と自證分に依て而も生し、第八識の見分を緣じて、執して我と爲すが故に、我見識とも名く、第六識の主と爲り、六識所緣の境を轉じて、而も染淨となす、畢竟するに寢るも起すも皆我見識の所作である、此我見識は自から迷妄の窠窟を營みて、其中に住し、人我法我の牢獄に囚はれて出ること能はず、此七識を轉すれば、自他平等無二の性を證するが故に、平等性智と爲す、由來一切衆生は我相、人相、衆生相、壽者相の四を計して、己が窟宅となして、我見我慢の角を増長す、迷人は財寶學問族姓等あるを恃んで、一切の人を輕慢するを我相と名く、仁義禮智信を行すと雖も、意高ぶり自から負んで、普敬を行ぜず、我れ

行者の我相を離るる

四相あるは佛相なきは

能く五常を行ふことを解すと言ふて、敬に合はざるを人相と名く、好事をば己れに歸し、悪事をば人に施すを衆生相と名く、境に對して取捨分別するを壽者相と名く、是れは凡夫の四相ちやが、一類修行者にも亦四相あり、开は心に能所ありて、衆生を輕慢するを我相と名く、持戒を恃んで破戒の者を輕んずるを人相と名く、三塗の苦を厭ふて諸天に生ぜんを願ふを衆生相と名く、心に長年を愛して福業を勤修し、諸執忘ぜざるを壽者相となす、四相あるは即ち是れ衆生なり、四相なければ即ち是れ佛なり、今や平等性智を得れば、人我法我も無くなつて了ふ、扱て此人我は至つて龜強なるも、未那識を轉ずると共に直に脱するが、法我は細軟にして中々容易に脱れるものでない、法愛を起すより生ずる法塵煩惱

惡獸の住み家を焼く

は、所知障と名けて、知つて居ると云ふ障りが着いてある丈け執着が深い、是れは悟後の修行で、此の人法二我を斷ずるときは、自佗平等無二我の性を證すのと同時に、人空法空を得るなり、二我が手に入ると佛界に徜徉し、魔界に遊戲して自由自在ちやが、我といふ窠窟がある間だは、兎角これに攀りつつ眷屬がへバリついて蕪穢しい、譬ては叢林蒙密茂盛なれば、狼惡獸潜かに其中に住して、毒發當るべからず、害を懼れて人近かざるも、智者あり火を以て林を焼けば、林空なるに因るが故に、諸の大惡獸復た遺餘なきが如し、人空法空にして、我見滅するも亦復是の如し。

分別識を轉じて妙觀察智を得るといふは、分別識とは第六意識をいふ、意は志なり思なりと訓じ、法を以て縁と爲して意識を生じ、前境に對して思慮分別するを以て意となす、全體法は分別を以て主と爲す、分別は意志の働きなり、然るに世間相對的の意思をば、禪門では都て惡智惡覺と稱して排斥せり、箇は知解分別を頭から排斥するでは無けれども、修行者の上に於て、眞智を障へるものは、相對的の惡智惡覺なり、例せば人に對するの我善に對するの惡煩惱に對するの菩提等と、凡夫の知解分別では、直に比較校量を取りて、絶對的の眞理に相應せざるが故に、主として此分別識を轉却せねば、佛の妙觀察智は生れて來ぬ、一たび妙觀察智を得た上は、還來して本の相對的智識を應用しても、凡夫の分別識で

妙の一字
で目玉の
入替へ

四辯八音

はなくして、妙觀察智となる、妙の一字で目玉を入れ替えて、佛眼となるときは、妙觀察智の働きは千手千眼で、一目見たら直に前機の善惡邪正等を洞察して、擇法眼の睨ひは百發百中して、謬らぬと云ふ力を具するなり、心地觀經には諸法の自相共相を觀察して、謬らずと云へり、是れは高廣狹牀若くは公會堂上に於て、人天大衆の前に向つて演說するにも、其滿坐聽衆の形勢を見渡して、臨機應變諸の妙法を説いて、不退轉の利益を得せしめ、一たび四辯八音を振へば、衆生は、類に隨つて各解を得せしむるである、是れは世智辯聰の事ではなくして、廣長舌相の智辯である、直饒ひ彼賀敦が斷舌の才でも及びもつかぬ、獅子吼無畏説である、世智や學問で成し得る、衆生濟度は知れたものちや、大法輪を轉じて世界の

能縱能奪
殺活二

衆生をして、立地に成佛せしむるでない、と妙觀察智でない、馬祖口を開けば即心即佛と云ふ、無業は一生莫妄想と叫び、瑞巖は毎日主人公と呼ぶ等は、出格の智辯で能縱能奪、其の殺活二劔を一たび揮ふときは、野干の腦裂け天魔の膽碎く。

二十六

五種識を轉じて成所作智を得といふは、讀んで字の如く、所作智を成就すといふことにして、是は眼耳鼻舌身の五種識を轉じて、此智慧を得るのである、何ぞか従前の見聞覺知は、相對的の凡見から出た執着の五種識ちやが、此の成所作智は聖智であるから、唯識論には成所作智相應の心品とは、諸の有情を利樂せんと欲するが爲めの故に、普く十方に於

今昔の變
化身

て種々の變化の三業を示現して、本願力所作の事を成ずとあり、種々の變化の三業とは身口意に法輪を轉ずるを云ふ、例せば觀音の耳根圓通といふ如く、諸根も亦圓通にして、眼根色を緣ずる、鼻根香を緣ずる、舌根味を辨ずる、身根物に觸れるも皆圓通である、一根既に通ずれば諸根も亦通ず、耳で見て眼で聞く、變化身は自由なものちや、昔は眼に見たる行燈は、今は洋燈となり、瓦斯燈となり、電燈となる、行燈でなければならぬと云はぬは變化身ちや、一物で其用を殊にして、郵便が進んで電信となり電話となり、無線電信となる、争でか變化身に非ざらん、所作智を成する智識文明の進歩、即ち聖智にして、皆衆生の善根を成就せしむ、靈雲が桃花を一見して得入した、疎山が擲つた瓦石が竹竿に中つて、カチと云

ふ一聲に所知を亡じた如く、香積世界では飯食で佛事を辨
 ずる、維摩は食に於て平等なれば、法に於ても平等なりと云
 ふ、一切衆生觸塵の覺する、妙觸宣明ならざるはない、五官の
 官能は各方面に方りて種々身相を現じて見聞覺知するは
 皆變化身の善根を成熟せしむるものにして、觀音の普門示
 現といふも、皆所作智を成就したもののちや、如來の他受用身
 は八萬四千の相好を具足して、眞淨土に居して諸の菩薩を
 して、大乘微妙の法樂を受用せしめ、第一の佛身は百葉の蓮
 華に坐して、初地の菩薩の爲めに百法明門を説く、菩薩悟り
 已つて大神通を起して、變化して百佛世界に滿じて、無數の
 衆生を利益す、第二の佛身は千葉萬葉の蓮華座ちや、普門
 可説微妙の國土に滿して、變化して衆生を利益安樂すとあ

觀音の普門示現

此座が千葉萬葉の蓮華座

觀音は即我なり

るが畢竟するに外の事でない、吾人の五種識を轉じて、成所
 作智が顯はれたら、即今此座が千葉萬葉の蓮華座ちや、普門
 の方面に手を分け、異類の社會に身を現じて、諸の機類に應
 じて方便濟度するもの皆成所作智ちや、十方刹土に身を現
 じて至らざる所なし、佛身を以て得度すべきものには、觀世
 音菩薩即ち爲めに佛身を現じて法を説く、乃至宰官將軍長
 者居士及び童男童女に至るまで、身を現じて爲めに法を説
 くを、總じて成所作智の働きといふ、觀世音菩薩とて、外に求
 むるでない、然れども凡夫の五種識では妄想分別ちや、轉じ
 て佛智と成すときは、觀世音菩薩は即ち我れちや、觀音は種
 々に身を現じ、隨處に説法して衆生を利益し安樂ならしむ、
 大法雲を興し、大法雷を轟かし、大法雨を降すといふ、放光動

地も外の事でない、禪門最後向上の些子を手に入れたものは、入塵垂手爲人度生と出掛けて、此四智を圓明にしつゝ、佛國土を淨め衆生を成就するを以て第一の目的となす。

理致機關向上

吾宗一法の人に與ふるなし、理致機關向上咄、是れ什麼の乾屎橛ぞ、正眼に看來れば這箇の陳葛藤は、衲僧面前に於ては固より一顧の價値もない、何の理致とか機關向上とか、醜婦の眉を嘔むる如く、醜上に拙を加ふるを爲さん、然れども記取せよ、無法の法も亦是れ法にして、箇は是れ寶所に臻る途中の化城なることを、且く道へ理致とは什麼ぞ、見性の端的なり、大乘佛教は見性の一法より外に何物もない、黃面老

寶所に至る化城

理致は靈の點睛

子成道の曉きより涅槃の夕に至るまで、都廬一團の硬鐵、苦瓜は根に連つて苦く、甘瓠は蒂に徹して甜し、徹頭徹尾見性を外にして一事もなし、然り而して見性成佛奚ぞ達磨の道破を待たん、威音王已前已後一切衆生皆圓覺を證す、奚ぞ雪上に霜を加へて、他の戴笠の苦を重ぬるを做さん、靈なれば止みなん、苟くも靈あらば見性成佛なり、理致は人靈をして益す、靈の靈たらしむるものにして、亦是れ畫龍の點睛なるのみ。

二十七

機關とは佛祖難解の言句を謂ふ、悟後の修行は此難解の祖關を透過せしむる爲めに設く、所謂一機一境枷を打し鎖

理致機關向上

七三

を敲き、釘を抽き、槩を抜くもの、是れを機關と謂ふ、向上の一著に至つては吾宗別に生涯あり、拈華微笑已來、的々相承底の些子及び百丈耳聾、臨濟破夏、白雲未在の話等、所謂衲僧の奪命の符と稱する末後句なり、理教機關向上は固より無階級の階級、無門に門を假設したるものにして、教家の五十二位の階級とは全然別である、禪門はどこ迄も、單刀直入なり、直下に成佛の端的を示して、百了千當せしむ、是故に越格超方の士に至つては、奚ぞ如上の閑葛藤を要せん、然れども法門無量なり、這箇の方便も亦是れ學者道中の化城と見て可なり、達磨すら猶ほ門人に示すに、皮肉骨隨の淺深を以てす、汝曷んぞ十把一束に、古人の葛藤を無事甲裏に葬り去りて、鬼窟裏に活計を營むことを、是れ做さん、或者は復云く、元と

達磨の皮肉骨隨

二祖の安心

向上なし爰ぞ理致の機關のと是れ争はん、譬へば乞兒が夜中錫を拾ふて喜んで銀なりと秘重するが如し、祖庭猶ほ天涯を隔つるありと、錯々、這箇闡提の邪見解は、一瞥糞堆上に葬りて可なるのみ、何となれば本と一法の情に中るなし、何の安心、不安心を論ぜん、と云ふ、是は則ち是なりと雖も、可惜、許、本と安心を要せざれば、達祖爰ぞ二祖に向つて心を將ち來れ、汝が爲めに安ぜん、と云はん、二祖も亦心を求むるに不可得なりと答ふるを要せん、焉んぞ知らん、此事實に大事なり、即ち是を見性底の理致を論じたる機關にして、後來三祖の二祖に於るも亦然り、弟子風恙に罹る請ふ師懺せよ、二祖云く、罪を將て來れ、我れ汝が爲めに懺せん、三祖云く、罪を求むるに不可得なり、二祖云く、我れ汝が爲めに罪を懺し了れ

三祖の懺

理致機關向上

七五

り、一槓に脱出して實に附法の大事を盡す、固より斯の如くならざるべからず、彼達磨門下の弟子が、其見解を呈するに各淺深あり、二祖の位に依つて三拜するを以て、達磨は吾髓を得たりと云ふ、軒かに知る得法の精麗あるは、人を驗する機關なることを、或者は云く、至道無難固より難も易もあるものでない、奚ぞ難易を論ぜん、諸祖の對面は目撃して道存す、何に由てか穿鑿を要するの急なるやと、是を崑崙棗子を呑むと云ふ、無事甲裏の禪は大抵此の妄解を擔ぎ廻つて、寄るなる觸るな、此身此儘が好いと定め込み、坐禪の看經の祖錄の看話のと、何の繫驢槓と喝破し去り、空腹高心、目了を甘んじて、諸佛無上の妙道を求めず、悟れば益す、參ぜよの祖言を無視して、自から斷見の穴に落るは、悲むべし、此輩初め

得法の精麗

無事甲裏の禪

より禪鼎に一指だも染めずして、大言壯語を吐いて、佛祖の言教を塗抹殺す、是れを楞嚴會上では憐愍すべき迷中の倍人と稱せり、噫。

二十八

然り而して諸宗皆理致を以て極則と爲すも、其理致の極に達して、冷暖自知底の境界を得たるものありや、多くは盲人の垣覗きにして、佛門内の美觀を争てか覩ることを得んや、古來の教者には得悟のもの絶無とせざれども、今は但是れ途路の艱險を論じて、悟證は未來成佛に托して問はざるが如きあり、淨土門の如きも彌陀を見るは、未來往生に一任し去りて現世には及ばぬこと、確信せり、故に是等の機類

淨土門の未來往生

空華の萬
行處空の
圖畫

には痴人面前説夢の所談に同くして、多く語るの必要を見ず、抑も學道は愈よ悟れば愈よ參じ、轉た進めば轉た退き、之を損して又損し、退步措磨して須らく従前悟得的の迷ひを除くべしとは、悟後修行に必要なる機關にして、古人は從來把本の修行肯て因果を弃捨せずと云ふてある、終日行して未だ曾て功なきも、空華の萬行を修せざるを得ず、終日説て未だ曾て益なきも、虚空に圖畫を繪く底の説法を要せざるべからず、傳大士云く、空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎り、人は橋より過れば、橋は流れて水は流れず、雲門云く、十五日以前は汝に問はず、十五日以後一句を將て來れ、自から代つて云く、日々是れ好日、雪峰云く、盡大地撮し來るに粟米粒の如し、面前に抛向す、添桶不會、鼓を打つて普請して

悟中の迷
をなく

密鍊潛修
の効果

看よと、這箇狐涎猫唾の機縁語句は、所謂千七百則ありと云ふ、皆是れ悟後修行底の消息にして、悟中の迷を除くものなり、決して一回打徹したから、千了百當せりと安堵すべからず、千了百當せりと云ふ、爾が此千了百當底をも併せて打破せねばならぬ、愈よ進めば愈よ退き、愈よ得れば愈よ削り、分毫上に向つて利を争ふに非ざれば、密鍊潛修の功果顯はれたりと謂ふべからず、譬へば鐵を冶するが如し、其微細の塵垢を去るの後ろ、千鍊萬鍛の功を経るに非ざれば、精鐵を見ること能はず、豈に容易にし去るべけんや、浮山云く、末後の一句始めて牢關に到る、指南の旨言詮に非ずと、是より已上は言詮の盡すべきに非ず、故に此一節は茲に筆を擱く。

古教照心

禪は不立文字教外別傳と云ふは、教内に對する教外にして、達磨所傳の一法が、教中に由つて生れたるに非ずと云ふ迄にして、禪は教と干係を絶ちたるものと云ふ極端論でない、禪は教外の別傳なりと云はば、教も亦禪外の別傳と稱すべし、若し禪は不立文字で、どこ迄も別傳であるから、一句一言も教中から取らぬと云へば、取りも直さず經の一字を離れたる天魔外道である、是故に古教照心とて、一大藏經五千餘卷は、禪家の一大公案である、教中の文身句身に由つて義を解するでない、一法も取らぬがまた一法も捨てぬといふ結論に歸著せねば、禪其物は生きて來ぬ、所謂看經の眼とは

嫌ふ底の法なし

經に依らずして、經と默契符合する故に、幸與修多羅合といふなり、要するに禪は一法の人に與ふるものなければ、復た嫌ふ底の一法もなし、經に逢ふては、經を説き、禪に逢ふては、禪を説く、之を活衲僧と名く。

二十九

夫れ文に依つて義を解するは、固より教内に屬して、教外の徒は別に用事もない様なれども、此事大に考慮を要せざるべからず、何となれば、經の一字を離るれば、則ち禪も亦眞實に非ず、是故に禪門は教を以て信縁となし、明窓下に古教を繙いて、心を照すの標準となすとは、畢竟己が所證の眞偽を驗せんが爲めのみ、直饒ひ偏透關の眼を具し去るも、其所

明窓下に古教照心に

證幸に修多羅と合するに非ざれば、愈よ透過して愈よ道に遠かる。未だ以て眞と爲すべからず。是故に古人は見性の後ち、經を以て心を照して、己が所證少しも經論の所説と齟齬せざるや否を驗せんが爲めにす。是故に、樂山は青松下に經を繙き、黃檗は看經して、淹黑豆を數ふ、教外別傳の客にして、經を讀み佛を禮すること、斯の如じ、正眼に看來れば、大藏五千餘卷は、豈に翹た衲僧の一大古則なるのみならん、花笑ひ鳥啼き雲飛び水流るゝ、盡く活公案なり、眞に能く此經を讀むものは、築着磕着海印光りを放ちて、坐臥經行皆是れ諸佛の道場ならざるはなし、此に至つて經の一字離れざるを欲するも亦得べからず、是を古教照心と謂ふ。

報恩

報恩の二字は、萬物の靈長たる人類が重んずべき道德なるは、今更に言ふも愚かなることなれども、世澆季に屬すると同時に、人情浮薄に陥りて、報恩を忘卻するもの多く、却つて鳩に三枝の禮あり、鳥に反哺の孝ありといふに劣るもの寡しとせず、全體鳥や鳩は固より業識の然らしむる所より知らず、蠢動するものにして、報恩の意味でなしたる事でもあるまいかなれども、人として恩義に負くは、たとひ法律上では罪となさざるにもせよ、明かに人類の不徳を示して天地に容れられざる罪過にあらざるにもせよ、理性の根原に溯りて推究すれば、亦是れ心垢と謂はざるべからざる

眞實の
報恩の

なり、若し報恩は返禮なれば、君父師長が我を慈愛保育せざるに於ては、何の返禮か之れあらんと云へるが如きは、いかにも勘定的なる冷たき言ひ分に非ずや、吾人は斯る物を賣買同様なる報恩の解釋は、人生の意味を没却する不道德なるものと思へり、予の如きは初め生るや呱呱の聲を揚げず、二歳に及んで百日咳に罹り、殆ど絶るに至りしも、父母の慈愛は難有いもので生存を得て、其後ち因縁ありて出家し、臺家高諄實裕二師の鍾愛を蒙りたる事多歲、然れども蒲柳の弱質は心身共に不活發にして、何事も思はしく發達せず、明治八年の春上京して、伊達自得居士の和歌禪堂に遊び、唯我韶舜師等と件を結び、又退耕先師に麻布の天真寺に従ふて坐禪すること半載、専ら内觀法を用ひて逆上を治す、當時

無垢清淨
の報恩

夜船閑話の軟蘇法を用ひて進工す、幾回瀕死の弱體も回復して、耳順の類齡に及ぶも、心身ともに健全なるは、全く父母師長の大恩なりと、只管感謝して心ばかりの報恩經營に努めたりき、抑も君父師長の大恩は、生々世々報謝せざるべからざるものにして、彼歐化主義なる權利義務を主張し、賣買的交換の心得にて報恩を表するなどは、大和民族に相應せざるものと知るべし、縦しや君君たらざるとも臣臣たらざるべからず、父父たらざるとも子子たらざるべからずとは、和魂を有するもの、無垢清淨なる情的報恩と謂ふべきのみ。

三十

皇恩を報ずるは第一にして、父母衆生三寶恩に報じ、四恩

四恩の從
淺至深

に感謝するを以て、徳の全きものとす。心地觀經には國王恩を第三に置きしは淺きより深きに及ばすものにして、所謂父母恩の個人的より、衆生恩の社會的に及ぼし、國王恩の國家的より三寶恩の世界的に及ぼし、肉體より精神と益す恩分の向上するに至らしむるものなり。要するに報本反始なるものは、此四恩を報ずるの謂にして、人類の美德をして益す圓滿ならしめんとするに在り、況や生を皇國に稟けたるものをや、吾人は此樂土に生れたる因縁果報を知らずんばあるべからず、諺に云く、袖の振り合ふも多生の縁とかや、此土に生るゝ因あるを以て、君臣父子夫婦昆弟朋友の親厚なる縁に由つて、他國人に勝るゝ果報を得たるは、決して一朝一夕の故にあらず、皆是れ、遠祖積徳の餘慶より來らざるは

心地觀經
大和民族
の鑑

なし、故に因果の追遂離るべからざるを懼れ、惡因を子孫に傳へざらしめず、常に神佛の威徳を仰いて、家運の幸祉を祈るべし。家族制度は遠く祖先より因縁果報の聯絡して、詰り一人の惡徳は小にしては、一家一門に及ぼし、大にしては國家に害を友ぼし、心地觀經報恩品は此段の因縁を反覆訓誨して、黃面老子は末世人類の安寧幸福を加護し、給はんが爲めに説く所の經なれば、大和民族は座右に離すべからざる箴銘と謂ふべし。此事は思益居士も丁寧に遺囑して置かれたり、要するに此經に由て修行せば、現世の利益を得るのみならず、進んで出世間賢聖の域にも登るを得べし。

謹んで惟みるに、吾が欽定憲法は世界未曾有の法典にして、第一條に君主統治の大權を掲ぐる劈頭に、大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治すと書せしを能く見るべし、是が憲法の精神にして、他邦と類例を殊にしたるを知るべし、皇統一系は列國中にも珍しからぬが、萬世一系の四字は匹儔を見ず、此第一條は憲法の全體を貫いて、自餘の條章は皆此より出生す、抑も吾邦の卓絶せるもの、僂指するに違あらざれども、約するに八あり、天壤無窮の寶祚悠久なるは、世界に其比を見ざる一なり、皇室先きに建て國民後ちに生ず二なり、天皇は君父にして神聖侵すべからず、民人は臣子にして上に加ふるを得ず、其大義名分古より定りて、動かすべからず三なり、國體超然として政體の上に立ちて、府中時相の政

治何如に由て、累を宮中に及ばさざる四なり、報本反始の大道は吾邦の特徴にして、皇祖皇宗を敬崇して其恩徳を感謝する遺訓は、上下に徹して祖先崇拜を重ずる五なり、忠君愛國の至誠横溢して、上下一致氣節を重んじて、犠牲となるを甘んずる六なり、家族制度の團結は組織鞏固にして、個人主義の分崩に勝る七なり、一朝事あらば舉國一致して、義勇團體速かに成る八なり、中に就て家族制度の美は、他邦に其比を見ず、天皇は大局を統べて六千萬の同胞は、皇室を中心として、聖上を家族の長と仰ぎ、君民一團和氣、靄々たる家庭は、是れ即ち皇國の精華にして、君民一體血を分けたる親子の如く、君は民を愛し、民は君を慕ひ、君民其利害を同ふすと云ふの國風は、他邦に視ざる所なり。

の 教 育 勅 語
御 誓 文 條 文

惟みるに吾邦智徳の源泉は教育勅語に發して上下に感孚し而して智能を啓發し徳器を成就すといふは遠くは神儒佛三道より濫觴して近くは五箇條の御誓文より出づ乃ち第一に廣く會議を興し萬機公論に決すべし第二に上下心を一にして盛んに經綸を行ふべし第三に官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す第四に舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし第五に智識を世界に求め大に皇基を振起すべしとは今上登祚の初め天地神祇に誓ひ給ふものにして教育勅語の源も此に發して而して聖旨の深宏なる仰いて信すべし爾しよ

一 等 國 の
月 桂 冠 の

り二十五年益す世界の智識を徵集して東西相倚り人文日に將みたるは振古未曾有の盛を致すのみならず清露の兩役に我武維れ揚りて世界一等國の月桂冠を戴くもの固より聖上の御稜威に出るは論なきも官武一體上下一致の團結力は夙に教育勅語の普及に因らずんはあらざるなり想ふて茲に至れば高々たる峰頂も皇恩の高き比すべくもあらず深々たる海底も聖澤の深きに喩ふべくもあらず

宗 教

地球上人跡の印ずる所ろ宗教有らざるはなし東西邦を殊にし文野教を分ちて大小權實半滿偏圓等の異ありと雖も天下一日も無かるべからざるは宗教なり宗教の體裁儀

式は則ち遞代奢儉同じからず、弛張も亦時に随つて伸縮あり、今や世界各宗教の甲乙對照比較校量の標準を示す如きは、寡聞謏劣の著者が能くする所に非ず、斯篇は現時吾邦神儒佛三道を略論するに過ぎざるものにして、要するに三教の一致は吾人の主張する宿論なりき、世の論者神儒二教を以て宗教に非ずとなすは、皮相の見に過ぎず、吾人の見處に依れば、神儒二教は佛基兩教の如く、本尊及び本尊所説の經文を組織的に具備せざるも、神道の報本反始の道を述べて、安心の方向を示すものと、又儒教の勸善懲惡正心誠意を説くの心法に至つては、準宗教的の體裁を備へたるものと謂ふべし、加之ならず皇祖は寶鏡を以て、我が御魂となして齋き祭れと、皇孫に詔り給へる勅語は、取りも直さず經説にし

神儒佛三教一致の宿論

神儒も亦是れ宗教

孔孟の宗的旨

て、其字句の間だに不言の妙旨を含有して、吾人の仰ぐべき信條となすべし、儒教の道統は五帝三皇を経て、孔子に至つて大成したるものなり、堯曰く、允に其中を執れ、孔子曰く、參乎、我道一以て之を貫く、曾子云く、唯と、唯の一字言語を以て解すべからず、宛も世尊花を拈すれば、迦葉微笑する以心傳心の妙訣に似たり、孟子養氣の章は精神修養に資すべし、要するに儒教は孔子を本尊にして、學庸論孟は經傳となして、一部の宗教と爲すも、敢て不可なるなかるべし。

三十三

神道は、峩冠束帶の神人が社殿に立たるが如し、仰ぐべくして、近くべからず、儒教は、執政大臣が廟堂に坐するが如し、

百姓は測り知るべからざるの概あり、佛教は母の懷に眠れる兒女の如し、嬰孩が乳根を吮ひつゝあらたのし虚空を家と住みなして、須彌を枕に獨り寐の春の状あり、神儒二教の男姓に、佛教の女姓を抱合せしめ、打して一丸となさば、完全なる日本宗起らんか、鎌倉右大臣實朝公の和歌に、神といひ佛といふも、世の中の人の心の外のものかは、吾人嘗て謂く、神儒佛皆我心なり、性本と一なるも、體宗用と働きを異にす、神に非ざれば體すること能はず、儒に非ざれば持すること能はず、佛に非ざれば達すること能はず、佛宗は自性の根源を徹照して、大覺朗然神儒の體用をして、遺憾なく發達せしむるものなれば、神儒も亦佛を待つて其完成を期すべし、新來の哲學の如きは、僅かに内地に發芽したるのみにして、將

來其枝葉は日本人を庇蔭するに足るべきや、果して我が國民性に合するや否やは、今猶ほ試驗中にあるものゝ如し、吾人謂く、泰西諸科學の進入は、文明智識を速成せしむるものと雖も、其人心を悅服せしめ、世道を維持するものは、神儒佛三教に在り、蓋し三教は夙に國民性の原素となりて、千有餘年前より國內到る處、神社佛閣學校の具體的形式の信仰標準ありて、民心に感化したるもの、牢として抜くべからず、若しも吾邦に此三教を捨るあらんか、我が國民性は全然滅却せんのみ、記取せよ、吾人大和民族には、人人脚下に黄金のあり、自家の珍を唾擲してまで、新學に垂涎し、國家の根柢を顛覆しても、外募に汲々たるべしとは、亡國の暴言なるのみ、要するに自家の本立つて、而して洋才を迎へて國家に資

九六
するは、廣く智識を世界に求めて、皇基を擴張すべしとの聖旨に副ふべきのみ。

三十四

之を要するに、宗教なるものは顯幽二界を通じて、化を現在將來に及ぼし、轉迷開悟の信條を具備するを以て、教義の完整となす、若しも神儒二教にして三世因果解脱開悟の法門ありしならば、固より佛教の渡來を待たずして、吾が國の人心を満足せしめしなるが、一長一短は免かれざる所に、して神儒の現世教は、佛教の未來主義を兼ねること能はず、是故に吾が先皇は三教を平等に弘通せしめて、益す國民の福祉を厚ふせしめんと、の聖旨の辱き之を仰げば、愈よ高し、由

生れぬ先
の父母

肉體的の
榮華

來宗教なるものは、人類理性の本音を傳ふるものにして、吾人をして親しく生れぬ先きの父母の面目に接せしむるを得せしむる紹介者なり、吾人は時間に於ては五十年の短期なるも、精神界の壽命は過去久遠劫より盡未來際までの無量壽を保ち、空間に於ては眇たる五尺の形骸たるに過ぎざるも、精神界の領分は宇宙に瀰淪して、天に在ては天に同ふし、地に在ては地に同ふする、廣大無邊のものたるを忘却してはならぬ、彼黃梁一炊の夢を貪り、槿花一朝の榮華に眩惑せられしものは、固より同日の論でない、彼等は外觀は美なるが如きも、内心は既に腐敗せり、彼等は煩惱の桎梏に繋がれ、妄想の牢獄に囚はれて、自由の天地に遊ぶことを得ざるは、其苦痛何如ぞや、幸に吾人は昭世に生れて、法の花笑く

春に逢ふを得たり、何の喜か之に加へん。

海鼎一味

三十五

而して吾人は隴を得て蜀を望むものは他に非ず、吾が國民性の美質を發揮して、國民の元氣を伸達せしめんとせば、國家が對宗教策を更正せざるべからず、由來吾が國民性は先天的に神儒佛に傾いて、三教鼎足の形をなして、安心立命を得せしめたるにも拘らず、然るに國家の待遇に至つては、甲乙參差として、權衡を失したるが如きあり、神道に對する政策は遺憾なしとするも、儒佛二教に於ては、輓近交通機關の發達と共に、山場僻陬に至るまで、精神修養と云ひ倫理講義と云ひ、學校に家庭に宗教の呼聲の高きは、日に月に盛

國家對宗教の更正

政治の要素は國民性を助長して、益するに在るなり

んなりと謂ふべし、抑も政治の要素は國民性を助長して、益す厥の美を濟さしむるに在り、況や我が忠孝倫理は儒教に根柢して、教育勅語の聖旨も亦此に淵源せざるはなし、之を大中小の學校に施して、多數の頭腦を支配するものは儒教なりとす、佛敎の感化の如きは世既に定論あり、其伽藍殿堂の美觀を有すると同時に、國家的觀念を幫助したるは、天下の普ねく知る所なり、吾人の對宗教策は決して望外の不可能事を期待するに非ず、國家が古敎を待遇するの道に於て失望せざらしむれば足るのみ、今の所謂對儒佛策は、殆ど二敎の存在を認めざる迄に、其興廢存亡とも成行きに放任し去りて、不問に付したるが如き觀あり、故に國民の二敎に對するや、神敎の如く重からざるのみならず、動もすれば公認

宗教

教に非ざるが如き觀をなすものなしとせず、古人云く、禮は玉帛に非ざれば表はれず、樂は鐘鼓に非ざれば傳はらずと、形式の表示に非ざれば、人をして信ぜしむること能はず、是を以て吾人は謂はく、吾が神教に準じて國家は儒教を代表するに、神田の聖堂に於て年一回釋奠の典を擧げて、先聖孔子を奉祭し、佛教各宗を代表するに、奈良の大佛殿に毎年一回皇族の觀臨ありて、遠く一千七十年前聖武天皇の觀願の前例を追ふて、法要を復古せしめ、國民の國教に對する至誠の情念を厚ふせしむるあらんか、夫れ斯の如く精神界を統一するの方針を示さば、國民の思想を健全ならしむるに於て、思ひ半に過るあらんとす。

神田聖堂の釋奠

奈良大佛の勅祭

精神界の統一

三十六

原ぬるに宗教の名稱は、中古より起りたるものゝ如し、釋尊出世の當年に、奚ぞ宗教なる名稱あらんや、世尊は只是れ迷妄の凡夫を救濟し給はんとの大悲心より外なし、此時豈に宗教の名あらんや、大教の支那に渡るに及んで、始めて宗教の名あり、然れども當時宗教なる名は、今時の人の稱するが如くに非ずして、達磨が教外に別傳するものを宗と名け、文字言句の教内に傳ふる、一切經五千餘卷及び各宗派の法門を總して教と稱せり、故に普通世間に所謂政治法律學藝伎術等に對して、宗教と速呼するものと、其趣きを異にせり、之を要するに宗教は精神學にして形而上安心立命の法則

神田聖堂の釋奠

聖人の地は天有
地は無人

を。示。した。る。も。の。を。稱。す。乃。ち。形。而。下。の。物。質。的。學。問。に。超。然。し。て。宗。教。界。か。ら。詠。む。れ。ば。畢。竟。天。地。は。一。大。宗。教。に。し。て。吾。人。心。靈。の。所。造。に。非。ざ。る。も。の。は。な。し。此。道。を。説。く。も。の。を。聖。人。と。云。ふ。故。に。聖。人。は。有。言。の。天。地。な。り。天。地。は。無。言。の。聖。人。な。り。茲。に。至。つ。て。は。宗。の。教。の。と。別。に。其。名。を。異。に。す。る。に。及。ば。ん。や。然。れ。ども。達。磨。禪。の。示。す。所。る。直。捷。簡。明。し。て。常。に。指。歸。を。得。せ。し。む。所。謂。宗。は。尊。な。り。主。な。り。と。訓。じ。て。直。指。人。心。見。性。成。佛。の。宗。門。に。は。直。下。に。指。示。し。て。途。中。に。滯。ら。ず。人。を。し。て。寶。所。に。歸。入。せ。し。む。る。は。猶。ほ。千。波。萬。浪。大。水。小。水。の。盡。く。大。海。に。流。入。す。る。が。如。し。宗。既。に。其。歸。著。を。示。し。て。教。何。ぞ。然。ら。ざ。らん。や。然。れ。ども。教。は。宗。の。如。く。一。超。直。入。一。刀。兩。斷。の。も。の。に。非。ず。成。佛。を。未。來。に。期。待。す。る。を。以。て。本。旨。と。な。す。其。指。示。の。異。あ。る。を。知。る。べ。し。

支那の歴史

三十七

禪法は唐宋二代五百年間を通じて流通の盛となす、彼武宗廢佛の反動力が一層禪宗をして勃興せしむるに至りて、五季より趙宋の世に移るに逮んで、臨濟曹洞の全盛は禪海の汎濫洋溢して、底止する所なきが如し、而して士大夫の此宗に心を傾くるもの、黄山谷、蘇東坡、楊大年、張天覺等の名家ありて、外護の任に盡せるもの比類なきを見る、禪の吾邦に東漸せしは、今より千二百五十年前即ち天智天皇の元年、南都元興寺に禪院を建て、道昭法師を主とするに昉まる、其後ち唐の義空禪師の渡來より、傳教慈覺、覺阿等の諸師に尋いて、榮西禪師に至つて、建仁寺を創立するに迫んで、始め

て形式上の信標を示すに至るも、禪化の最盛なるは、北條時頼時宗二氏、鎌倉に建長圓覺兩寺を創建するを以てす、既にして京都に於ては後醍醐天皇の未だ儲位にまします時、夫の大應に參して、もゆる火を分けても、法を聞くべきに、雨と風とはなに厭ふらん、の御製ある如き、其盛んなる一端を證するに足るべし、尋いて赤松氏の大燈國師を請じて大徳寺を創むる、尊氏公の夢窓國師を師として天龍寺を建つる、花園天皇の關山國師を師として妙心寺を開基し給ふ、義滿公の妙葩和尚を請して相國寺を建る等より、上下翕然禪化に風靡せられしは、斯の時より盛んなるはなし、應仁已降兵馬控惚の間だに、文運を維持するものは五山文學にして、當時禪侶の左街僧録司なる官稱は、國政に參與して樞機を掌握

し、威權赫灼たりしものあり、然れども、箇は宗教の原動力と謂はんより、寧ろ他動力と稱すべし、宗教の盛は茲に非ずして正に在り、古人云く、佛法正に在れば則ち天魔外道も破壊すること能はず、盛に在れば則ち鬼神陰かに其福を嫉むと宜なる哉、佛法の御祭り主義の盛りし地は、既に是れ正報の根幹腐朽したる後ち、枝葉の惰力餘青遺すが如きのみ、徳川氏の起るに及んで、元和偃武と共に文學繁興して、禪門は一時衰ふと雖も、正宗國師の出るに迫んで、已墜の眞風を扶起して復振ふ之を要するに、禪は古今を一貫して盛衰なし、鼎の輕重豈に他より問ふべきものならんや。

信教自由
の解釋

安寧秩序
と臣民の
義務

顧みて吾邦の古史を案ずるに、初め應神の朝に儒教東漸して、綱常倫理の名教大に發達し、欽明の朝に佛教東漸して、轉迷開悟の宗旨は上下に傳播するに至りし、此二教の渡來は國勢發展上の一變化を來して、此より政教大に進みたりし、爾しより千有餘年明治維新の今日は、憲法に信教の自由を許したる明文に依ると、日本臣民は安寧秩序を防げず、及び臣民たるの義務に背かざる限りに於て、信教の自由を有すとの條件を付したるあり、抑も安寧秩序とは、蓋し君主の大權を尊信して、萬世一系の天皇を推戴すと云ふは、吾邦の安寧秩序なり、臣民の義務とは、他なし、大義名分にして、臣として君を侵さざるを以て、臣民の義務とす、元來儒佛二教は主觀的なるが故に、此等の安寧を防げ義務に背くなどはな

山西文明
學術を吞
吐する力

いが客觀的に心外に神を捏造するものには、君主より神を尊しとして、臣民の義務、君を無し、父を無するは、軒かに臣民の義務を缺くものと云はば、るを得んや、科學哲學は智識の方面に向つて進歩しつゝあるもの、國家の厚生利用の發達を促がすものなれば、雙手を舉げて歡迎すべし、昔者菅原道眞公は和魂漢才と云へるは、實に千古の確言にして、固有の和魂を活用するは漢才に在り、然れども菅氏を距る千年の今日は、和魂洋才に非ざれば、智識を發達せしめて、國利民福を増進すること能はず、由來日本人は東西の學術文明を吞吐する能力を有せり、故を以て其國內に輸入し來るものは一旦咀嚼して、國民の腸胃に適するや否やを試験して、適者は吞み不適者は吐くといふ筆法を以てして、初めより多き

採擇を
用せは危

を食りて鵜呑せざりしは是れ吾邦の慣手なり斯の如く他の長處を取て我が不足を補ふが故に嚮きには漢才を採り今は洋才を用ゆ漢洋の才は畢竟日本鳥の羽翼なり之をして飛翔に自由を得せしむるは才の美と雖も若しも採擇を認りて濫用するときは危険の害踵を旋らざるに至らん適例は彼無政府共產主義の一派なる幸徳秋水等の大逆事件に在り斯る危険蟲を驅除せざるを得ざる様では教の威力既に衰へたるものなれば今後は各教共に該蟲の微菌を防遏して其毒を未發に豫防せざるべからざるなり

譯冊一昧

一〇九

三十九

抑も佛儒二教の感化は古より國民の腦裏に浸漸して大

維新前の
志士仁人

義名分を正す名教と武士の面魂を練る禪法は固より國民性の然らしむるものと雖も其成功は寧ろ佛儒二教に在りと謂ふべし往昔既戸皇子の憲法を製定するの業及び鎌足の偉勳道眞の賢宰時宗の禦寇正成の忠烈親房の勤王等は拔群にして其他相家武門と云はず英雄の君を輔け國を護る者職として佛儒二教の指導に由らざるものなし近くは彼徳川幕府の末造に方りて志士仁人迭出して尊攘の大義を唱ふるものも復是れ神儒佛三道の感化の餘烈と謂ふべし既にして王政復古の盛運を來したるは諸國浪士の功に歸して去年迄の一書生は今は廟堂に鈎軸を握るといふは維新中與の當座である抑も當時世人は動もすれば輒ち天下國家と云ふが天下の本は國に在り國の本は家に在り家

宋 敬

一〇九

神佛は
心なり

神佛一味

二〇

の。本。は。身。に。在。り。身。の。本。は。心。に。在。り。神。佛。三。道。と。云。ふ。も。實。
は。心。の。事。な。り。心。を。離。れ。て。一。法。も。あ。る。こ。と。な。し。心。外。に。あ。る。
造。り。つ。け。の。三。教。で。は。間。に。合。は。ぬ。彼。等。幕。末。志。士。は。彼。不。義。の。
富。貴。に。耽。る。も。の。を。弾。劾。し。忠。義。節。操。を。傷。る。も。の。を。攻。撃。す。る。
は。其。人。を。攻。む。る。に。非。ず。し。て。其。罪。を。攻。る。な。り。而。し。て。罪。其。物。
を。惡。む。は。實。は。良。心。の。汚。垢。を。惡。む。な。り。彼。等。は。不。義。の。も。の。を。
捕。へ。て。先。祖。の。面。に。泥。を。塗。る。を。嫌。ふ。も。實。は。先。祖。は。即。我。な。り。
己。か。心。を。汚。瀆。せ。ら。る。は。市。朝。に。撻。た。る。よ。り。も。耻。か。し。く。
思。ふ。が。故。な。り。神。佛。の。威。德。が。斯。く。の。如。く。感。化。を。吾。人。に。與。へ。
て。日。夜。に。加。護。し。給。へ。る。大。恩。を。思。へ。ば。國。民。た。る。も。の。仰。い。て。
感。謝。せ。ざ。る。べ。か。ら。ざ。る。な。り。

神佛の
威徳

四十

日本の
佛敎
主義

死生一
如親平
等の出
據

佛敎は東洋諸國に四萬々の信徒を有する、世界的宗教な
るも、吾邦に渡米するに及んでは、全く日本化して、鎮護國家
聖壽萬安を奉祝するを以て、佛事の規模となす、而して禪學
の起原は鎌倉幕府開創と與に、大覺、兀庵、佛光等の渡米あり
て、大に武士道を鼓舞して、天下武士の安心は、禪を以て立脚
地となすに至れり、彼の死生一如、怨親平等といふ觀念は、武
人の鐵腸を鍛しめ、死を視ること歸るが如くといふ安心と
同時に生には敵味方の分ちあるも、死しては平等といふを
以て、武士の涙は敵の死骸に濺いて、厚く葬ると云へるなど
は、佛陀の大悲が、武人の腸に刻み込まれたるより、起りて、勁松

宗
教

二一

は。歳。寒。に。彰。は。れ。忠。臣。は。國。危。に。見。る。と。い。ふ。武。士。の。最。後。の。見。事。な。る。も。亦。此。よ。り。發。源。せ。ざ。る。は。な。し。神。儒。二。道。は。生。を。道。ふ。て。死。を。道。は。ず。佛。教。は。死。生。一。如。と。い。ふ。が。實。は。死。生。を。初。め。よ。り。見。ぬ。な。り。蘇。東。坡。云。く。道。理。心。肝。を。貫。き。忠。義。骨。髓。を。填。め。須。らく。死。生。の。際。に。談。笑。す。べ。し。と。は。儒。佛。に。出。入。し。た。見。處。で。あ。る。忠。義。骨。髓。を。填。む。る。は。可。い。が。道。理。心。肝。を。貫。く。は。儒。見。で。あ。る。吾。が。這。裏。は。物。來。れ。ば。則。ち。照。す。の。み。本。來。無。一。物。で。胸。中。に。道。理。の。安。ず。べ。き。も。の。を。要。ぜ。ず。慧。立。の。這。裏。に。生。死。な。し。と。面。白。い。こ。と。ぢ。や。生。何。れ。の。處。よ。り。來。り。死。何。れ。の。處。に。去。る。な。ど。云。へ。る。間。だ。は。ま。だ。死。生。を。脱。得。し。た。と。云。は。れ。ぬ。眼。光。落。地。の。時。作。麼。生。か。脱。せ。ん。と。云。ふ。兜。率。の。生。死。關。を。得。た。も。の。は。脱。洒。自。在。に。な。る。生。死。に。屈。托。の。な。い。處。か。ら。思。ひ。切。つ。た。名。譽。の。

戰死も遂げらるゝのである。

四十一

神儒二道には死生觀を説かぬでもないが、佛教の様に生死輪廻因果報應及び死生平等顯幽一如といふ安心は、詳かに説いてない、神道は國體を明かにする故に體なり、儒道は人道を明かにする故に用なり、佛道は歸着を示すが故に宗なり、神儒の體用に加ふるに、宗旨を明かにしたるときは、鬼に金棒を持たせた如く、ぢや、宗旨乃ち自性の本體に達するときは、脚跟下に暗き處はない、神道は唯神の不言の教である、儒道は人道の大本名教を主とせり、之を總轄して性海の波瀾を盡し、靈臺の玉璽を握りしめたるものは、佛教なりと。

す。故に吾が先皇此の三道を以て國家を統治するの要素、人心を駕御するの根元と爲し給ひて、三教の性的乃ち中を以て大本とし、喜怒哀樂愛惡欲の七情の和を以て達道とす、此の中和は體用して神道の體と儒教の用に加ふるに佛教の宗を以て歸着せしむれば、復た以て加ふるものなかるべし、輓近情的を本とする教育の頻出するあるより、危險思想を惹起せしめたり、全體教育上に於て危險分子を含まざるは、以ての外の事と云はねばならぬが、物質的の教育は情を本とするが故に、情海に奔蕩するの結果は、恐るべき君父をも無視して無政府主義となり、自由平等を悪用して優勝劣敗を主張するの極は、人の心靈を埋没して肉慾の奴隸たらしむるに至つて止まんのむ、西哲ウエリントン曰く、宗教なく

神聖一統

一一四

して人を教育するは、恰利なる惡魔を作るなりと吾人は謂はん、惡魔を使役して護法善神となすは、宗教の効力にして、性的教育は健全なる國民を出生するを見る、宗教と離れたる自由意志の情的教育にして、未だ曾て善良なる人格を打出したるあるを聞かず、後來世界の平和を冀圖して、人類の幸福を得せしめんとするには、東西を問はず教育の方針は性的を本とせる主觀的教法に歸して、始めて善良なる國民產出を期待すべきなり。

四十二

吾邦三教の首唱者は聖德皇太子なり、太子は推古の朝に攝政して、大に國家の政法制度を創成して、盛んに經綸の偉

宗教

一一五

業を興し、篤敬三寶の規定を憲法に示して、臣民をして嚮ふ所を知らしむ。其後吉備大臣、藤原鎌足、菅原道真等の名相及び頼朝、時頼、時宗等の武將出るも、皆太子の餘唾を嘗むるに過ぎず。建武中興の名將楠廷尉、北畠准后等の如きも、亦此範圍を出でず。足利十三葉は正義地に墜ちて振はず、織豊二氏は兵馬倥傯の間に在りて、學門の素養なき霸政は、争てか三道を應用するの餘地あらんや、二氏の後を繼て文武兩道に心を傾け、神儒佛三教を以て治世の大本を講じたるは、徳川家康公なり。公は能く國家治亂興廢の跡を鑑み、三教を以て己が藥籠中に納め、武士を涵養し、民庶を懷柔して、宗教的政治は大に時艱を救ひしのみならず、敬神愛儒尊佛に餘念なかりしは、三百年の治平を致す所以にして、復た克く善教

東照公の
敬神儒佛三

徳川氏の
勤王

を民に施したるものと謂ふべし。議者或は云ふ、徳川の興るや、王權を私用して久く假りて還さざるを罪すと雖も、然れども、徳川は勤王を以て亡びたり、乃ち幕末勤王志士の起りしは、曩祖家康、光國等勤王論首唱の異熟果にして、二百年後の兒孫致命傷に中りて、其最後を早めたり。所謂汝に出るものは、汝に還るものにして、復是れ因果報應の輪廻と謂ふべき乎。

四十三

王政維新の初め、無學無識の執政官は、古先帝皇の典型に則らず、幕府の遺策を無視して、亂暴狼藉を恣にし、神を侮り、儒を斥け、佛を廢したる如きは、徳川への面ら當てかは知ら

佛の
神政

ぬが、随分慘酷を極めたるものと謂ふべし、這箇の稗政は固より天人の許さざる所なるを以て、須臾に復舊して寺塔の破滅を免れたるに至りしは、不幸中の幸と謂ふべくして、氣運循環天道正を好むの致す所なるべし、當時排佛毀釋の仕振りには、諺に所謂坊主憎けりや、袈裟まで主義にして、飛沫の及ぶ處國寶までも無くしたりし、こそ洵に悲しけれ、吾人も其頃親しく目撃したりしが、或る古刹の三重塔は、實に中古の名作なりといへるが、神佛判然した已上は、神社に塔は不用物なりとて賣却したが、買主も二束三文の價で買ったもの、足場を製して上段から瓦を卸すと非常な手間賃を要して引合はぬから、一案を思ひ付き、太き苧繩を塔の第一重に掛けて、多人數掛りて、遠方より引ズリ卸して、地に墜ちた

佛塔の破

三寶に人の心なり

金具などを賣り捌きしと、茲まで大膽に胸胸を極めて、行る段には懼れるものはない、昨日まで諸人が禮拜恭敬した佛塔を、今日は罪人を體刑に處する如き慘狀を呈して、目も當てられなんだと云ふ、全體住持三寶を佛臭いものとするは無眼子からちや、畢竟佛法僧は吾人の心なり、心の本來清淨なるは佛なり、心の本來無垢なるは法なり、心の本來和合なるは僧なり、體は則ち三と雖も、性は則ち一にして、性體靈妙諸法を照了するを佛寶と名け、恒妙の性德軌持すべきを法寶と名け、恒沙の妙德性相不二理事和合するを僧寶と名く、僧は漢に和合衆と翻す、吾人の性本來天地萬物と和合して相悖らざるが故に、佛は僧寶と標示するも、僧に限りたるものに非ず、人人和合の德性を忘るゝときは、人と和する能は

佛法僧を
憎むは即ち
吾身を
憎むなり

三〇
ざるのみならず、物と和すること能はずして、本具の大徳を
夫却せん、吾人自性に具したる佛法僧は之を離さんとす
も離れず、切つても切れぬものである之を憎まんとするは
我身をも兼ねて、其中に在かねばならぬ、奚ぞ其思はざるの
甚しきや。

神 佛

宗教には必ず本尊なかるべからず、神と呼び佛と稱する
其名は東西異なるも、皆超人的靈界の支配者を以て本尊と
して信仰を表示するに至るは一なり、吾人は何故に宗教の
必要を感じる、神佛を崇拜するは何の爲めか、言ふまでもな
く、神ならぬ吾人は、其神聖なる寶前に對すると、實に頭が下

神佛崇拜
の大原因

客觀的
と主觀的

り、崇高偉大の感に打たれて、覺えず自己の醜陋を白露して、
自から敬虔の至誠を傾け、懺悔禮拜の心禁ず能はざらむ、
故に天下一日も此吾人の心を安慰する救世主なかるべか
らず、而して造化教と因縁教の相違あり、造化教は客觀的に
して心外に神なる者を捏造して、神か世界を創造すと説く、
因縁教は主觀的にして、一切唯心所造と説き、諸法皆因縁に
由て生じ、因縁に由て滅す、神佛も亦因縁の外に立すべき地
なしと爲す、而して吾人は今茲に造化因縁の勝劣を論ずる
に非ず、要するに主觀客觀ともに、吾人精神修養穩坐地を得
れば、始めて足るのみ、抑も人類の靈性は至妙にして、本來神
佛に劣らぬ智徳を具したるも、愚痴迷惑にして眞性を覆
蔽するが故に顯はれざるも、全智全能の權は獨り神のでは

全智全能
無上の權
在り吾人に

トルスト
イの進化
宗教

ない。吾人が即ち全智全能無上の權を有するものなるが故に、一轉すれば是心是神にして神即ち自己自己即ち神なり。近來露國に於ける故トルストイ伯などは、殆ど佛敎主義に接近し來りたる主觀的に傾きたるは、其督敎者は異安心視するも、吾人は是を以て一段の進歩と思へるなり。

四十四

然れども太古草昧の世に在ては、人間の想像外なる靈怪に遭遇すると、直に神と崇び、水火山雷等の物より、動物の奇きものまでも、神となして信ずる野蠻敎より外なきが、智識の進歩するに随つて、一神敎となりて獨一上帝耶和華なる外に、神はないと固執するに至れり、其首唱者基督の如きは

野蠻敎

一神敎

乃ち云く、我の來るは平を致すに非ずして、乃ち我を致すなり、人々子として其父を疎し、婦として其夫を疎すべし、父を愛するを我に過ぐるは、我に好からざるなり、我れは嫉妬の神なり、我の外に神を愛するは、我れに好からざるなりと云々、這箇の訓誨は散亂疎動を警めて、心を一處に制せしむる方便かなれども、嫉妬怨恨は情の尤も僻したる邪想にして、君子は天を怨みず、人を咎めずと云ふ、聖賢には口から出すべき語に非ず、是等は外我見の臆病者にして、羸弱自己の頼むに足らざるより、他に屈強なる依頼すべき神を妄想捏造して、己が心を安んぜんとするなり、此一神敎は多神敎よりも進みたるものとするも、文明の度高く人智愈よ進むときは、心外に斯るゝ暴威を逞して、人智を盡惑する底の神人あり

神

二三

るべきなきを看破するに至つて、汎神教現ずるに至る、汎神教は神を以て一個人格視するものは大なる誤解にして、神は一部一局に偏するものでない、神とは普遍的にして、天地萬物森羅諸法にも神を見るべしと説く、是を汎神教と名く、汎神教は一神教の獨斷的臆説を逞ふするものより較勝れて、世間の智識と衝突の點少く、随つて哲學科學にも折合か可いかなれども、何にか物足らぬ心地するで、無神教となり、佛教と現はれて、益す心靈界の光明を發揮するに至りたり、語に云く齊一變すれば魯に至らん、魯一變すれば道に至らんと、道一變すれば何に至るであろうか、無神教の一變するときは佛教となりて、鬼神上帝も皆佛に仕へて、外護の神となる、闕澤云く、孔老は天に従ひ、諸天は佛に奉事す、全く比對

に非ずと、誠なる哉言。

四十五

佛教にも神と稱する名あるも、是れは佛を守護する所のものにして、上帝梵天自在天鬼神と稱するものは、天部又は、鬼趣に接して、六凡四聖(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、阿羅漢、緣覺、菩薩、佛)の中には六凡中に接す、故に聲聞緣覺菩薩佛の四聖に比すれば、神と稱する位地は甚だ卑し、又神道の八百萬神、儒教の皇天上帝鬼神神月と稱するは、耶蘇教主義の客觀的に非ずして、要するに神は心なり、主觀的心靈上の極に達したる神聖至尊のものを稱す、故に神道では報本反始と云ふて、神の本源最始に還歸するを神人一致と稱し、儒教では天人賛參と稱す、皆人と神が

一致するを云ふ、客觀的基督教では人が神となることを許さぬとは大なる相違なり、要するに思議界を超越して、不思議界靈妙の最尊を神と仰げば、固より吾人の認識已上にして、思慮分別の届くものでない、而して吾邦に於て奉祭する天神地祇は、皆是れ國土を創造して、功德を我等に與へ給ふものなれば、偏に神徳を畏みて神恩に酬ゆるを報本反始と云ふ、乃ち是れ吾人は皇祖皇宗の國土を經營し給ふ本源に溯り、最始に還歸するものなり、是故に客觀的の神の所立と雲泥の異あり、又上古に於ては神は現人の稱にも用いて、人を神と崇めたりき、是れ基督教の所謂神なる一物を心外に捏造して、全身を神の膝下に投ずる、的とは其趣きを殊にして、トコ迄も祖先の徳に對する謝恩的の敬神を勸弊するに外な

願不
陸十
光思
無慮
方無
議名
の異
は吾
り名
心な

らずして、要するに因縁教に接せざるはなし、孔子は鬼神を敬して之を遠くといふは、固より人道教なるが故に、鬼神や死の事は詳かに説かず、开は蓋し神威を夔瀆するを懼れてなるべし、之を要するに東洋の神儒佛三教は、神と仰ぎ佛と崇ひ聖人と敬ふは、皆是れ精心界に於ける無上最尊の稱にして、唯心所造の極致を稱したるに過ぎず、佛教にては彌陀とも不可思議光如來とも、盡十方無碍光如來とも稱して、吾人能歸の心をして、努めて所歸の佛と一體不二に至らしむるを以て、安心の要點となす。

禮拜祈禱

禮拜祈禱の事は、亦是れ其恩徳に感謝的の勤行なり、自己

の欲望を求むる禮拜祈禱を佛敎では痛く排斥せるは、是れ不合理的なる欲求なればなり、孔子疾あり、子路禱らんと請ひたれば、子曰く、丘が禱ると久しと、須らく知るべし、神に禱ふことは無きにしもあらざるも、病の療治まで神に請求せんとは、非理的の欲求であるから、孔子は排斥したるなるべし、佛敎に於ても此稱の禮拜祈禱は取らず、要するに禮拜懺謝の本意は、彼神佛の崇高偉大なる威徳を仰いで、己が罪愆を懺悔するを以て、眞正の禮拜祈禱と謂ふべきものならぬ、維摩經に云く、佛に着いて求めず、法に着いて求めず、衆に着いて求めずと、箇は是れ大乘敎の本領である、正眼に看來れば希求欲望を神佛の力で得んとするなどは、お門違ひであるから、這般の禮拜祈禱を絶待に排斥せり、黄檗希運禪師

禮拜祈禱の根元

黄檗の證

は鹽官の會下に在て首座となる、一日佛を禮する次で、大中唐宣宗見て問ふて曰く、佛に着いて求めず、法に着いて求めず、衆に着いて求めず、禮拜何の求むる所ぞ、黄檗云く、佛に着いて求めず、法に着いて求めず、衆に着いて求めず、常に禮すること、是の如し、大中云く、禮を用ひて何か爲さん、檗便ち掌す、大中云く、太龕生、檗云く、這裏什麼の所在ぞ、龕と説き細と説かんと云ふて、又一掌すと、大中の見處は、有功用を執して、求めなきに禮するは無効なりと思はれたが、黄檗は無功用圓頓一乘の眞理を枉げ出しにしてあるぢや、古句に春日閑さや願ひなき身の神詣てとは、亦是れ求めなき身の禮拜で、無功用を詠じ得て妙甚し。

四十六

水月の道
萬行の道

要を取て之を言はゞ、相對界の理屈から見れば、求めなきの禮拜は不可解であるが、茲に面白い味がある、學道は終日説て未だ曾て説かず、終日行して未だ曾て行ぜずと云ふことになる、既に是れ説いて居ながら、一字不説とは何ぞや、終日行じて居ながら、未だ曾て行ぜずとは、何にもならぬ無功事ぢやないかと言ふが、茲に水月の道場に坐して、空華の萬行を修すと云ふことを知らねばならぬ、水月の道場なれば不可捉である、捉るべからざるものを捕捉せんとするは不可能事であるし、又空華の萬行なれば修するも功なきのみか、働き損の草臥儲けである、斯く勞して功なき禮拜、看經な

眞正の禮
拜祈禱

四十七

らば、修せぬが可いと云ふは、斷見である、執着で求むるは常見である、爰に不即不離の妙處あるを知らぬと、中く眞理を見るのが能きぬ、佛教者の神佛に對する觀念は、概ね斯の如くして、神佛即ち自己で、心外に神佛を捏造して、威福を望求せる造りつけの、非佛教的は、到底眞の佛教でない、是れが佛教の他に超絶したるものと謂ふべし、文明智識の進むに隨つて、宗教も亦進歩向上して、初め多神より一神に進み、一神より汎神に進み、汎神より無神となり、針頭に鐵を削り、鷲股に肉を削る手段は、毛微塵ほども瑕瑾を見つけると、直に削り落して了らぬと、眞正の禮拜祈禱も顯はれざるべし。

教中に云く、己心本尊一體不二と、茲に至つて始めて安心を得たるものとすべし、故に信徒の歸衣厚きは、身命財を抛つて犠牲となるを以て満足せるは、世間普通から見ると夢想にも思ひも寄らぬことあり、斯の如き獻身的熱誠が顯はるゝに非ざれば、不思議界の神佛と同化すること能はず、而して神即ち心心即ち神といふなる一體不二なる一念堅固の信心信念は、固より前に述べた片た便りの造りつけの神頼み佛頼みでは、争てか始覺本覺還同一致の妙體に契合するを得んや、經に云く、法性は大海の如し、凡夫賢聖の人平等にして高下なし、心垢の滅するに由て證を取ること、掌を反へすが如し、茲に至らざる間、たは、只是れ宗教の假面を蒙むる偽善者なるのみ。

弘通

教中に序正流通の三を分つて、流通分を以て兒孫に遺囑して、展轉相承正法を宣傳せしむるは、如來の法身常在を示す所以なり、我が教外にも亦此の遺囑あり、臨濟遷化に臨んで據坐して云く、吾が滅後吾が正法眼藏を滅却するを得ざれば、即ち是れ流通分である、然しながら教中の如くに經教宣傳ではない、何ぞか當時弟子三聖慧然は、此の臨濟の付囑に答へて云く、争てか敢て和尚の正法眼藏を滅却せん、師云く、已後人あり、爾に問はば、他に向つて什麼とか道はん、三聖便ち喝す、師云く、誰か知らん、吾が正法眼藏、この瞎驢邊に向つて滅却することをと、這箇の一路索は、衲僧奪命の符と

稱する難透である。此寸法の度を逃れた處は、流石がに教外の宗丈けで格別立ち超へてある。楞嚴にも此深心を將て塵刹に奉ずとあるが、是れ亦弘通にして、佛祖不傳の大道を自から證得したる已上は、是を以て展轉して一切に及ぼし、大法を荷擔して盡未來際衆生を濟度し、以て佛祖の深恩に報ぜん。と誓ふは、即ち是れ末法佛弟子の義務なり。殊に直指の宗門には他事を問はぬ、眞に本分を持ち出して、一切衆生に此大事を證得せしむるを以て第一義となす。

四十八

禪門の弘通は固より傳授相承底なる、造り付けの閑機境を付囑するのではない。佛祖已來傳授すべきものは、爪の垢

一切衆生皆圓覺を證す
圭峰の風

ほどもあるのではない。一法の人に與ふるものはない。唯是れ衆生具有せる如來の智慧を證得せしむるものちや、圓覺經に云く、一切衆生皆證圓覺と説き給へり。古來圭峰は證は證悟の上に在りて、一切衆生が圓覺を證すときは當らぬ、一切衆生皆具圓覺で、具の字を譯者の訛りて證にしたのである。と咄々此の腥臭漢と眞淨は罵り且つ云く、圓覺若し改むべき維摩も亦改むべきなり。維摩豈に日はずや、亦受を滅せずして證を取る、夫れ受蘊を滅せずして證を取るとは、皆證圓覺の意と同じ云々皆證圓覺であるから、進んで見性成佛せねばならぬ。證は字書に諸孕切驗也明也とありて、吾人の皆證驗あること、佛の證明である。證とは實驗徹底して疑はざるを云ふ、一切衆生が皆證圓覺であるから、本具の佛性を

開發せねばならぬ。人々脚下に大光明あり、獨り佛のみでない。誰家の竈裏にか、火に烟なからん。禪家の傳道は他から入る智慧するものを痛斥せり、然れども信の厚薄に依て得入同じからず。大念は大佛を見、大信は大悟を得、是故に云く、源深ければ流れ亦大に、水高ければ舟も亦大なり、正信の大を致すに非ざれば、一乗の根源に徹すること能はず。達磨大師の西來は唯だ此大信根の者を求む、衆角多しと雖も、麟の一角以て足れり、千羊の皮は一狐腋に及かず、大疑の下に大悟あり、大疑とは大信の事なり、小信根の者は何の疑ひかこれあらん、大信者の一人を得れば、則ち傳授するに足るべし。

四十九

大疑は大信なり

楞伽宗説

宗通説通とて、禪門には宗眼明かならずして、人に向つて傳道するを非認せり。楞伽經に云く、宗に通じて説に通ぜざれば、暗中に眼を開くが如し、説に通じて宗に通ぜざれば、白日に眼を合するが如し、宗説共に通ずるは、白日眼を開くが如し、是の如きを大善知識と名くとあるちや、傳道流通も宗説兩通でない、人を善道に導くことがならぬ、孟軻云く、人の病は好んで人の師たるに在りと、人の師たるを喜んで、一盲衆盲を引くは、謗法の罪尤も甚し、退いて自から宗を研くに如くはない、扱て吾邦文明智識日に進むと雖も、迷信の徒依然として甚だ多きを免れざるは、是れ大に憂ふべきなるに、搗て加えて、盲修瞎練の邪師が出て、迷徒を誘引して、夫の人の子を賊ひ、禍を天下に貽すの害毒の懼るべきは、此事で

ある、加之ならず名教地に墜ち道義際廢して、大信のもの地を掃ふに至るは、今日より甚しきはなし、其鬼神に魁せられ邪師に誑かされ、病ひ膏肓に入るものは、姑く置いて論ぜず、間ま少信根のものあるも、所謂附木依草狐狸の精靈、一切糞塊上に向つて亂する底の徒、滔々たる天下到處に見ざるはなし、噫誰か人天の木鐸となりて、群黎を鼓舞し四海を廓清するものぞ、抑も眞理の曙光を認め實行の途程に躋らしむるものは、唯た是れ信の一字のみ、孔子云く古より皆死あり、民信なくんば立たず、死と勢力を争ふものは、信なり、信の人に於けるや、九鼎よりも重し、佛教の大海は、信を以て能入とす、信の徳たる至大至剛なり、信なければ佛法の寶山に入るも手を空ふして歸るに異ならず、然れども正眼に看來れ

死と争ふ
字は信の争ふ
なり

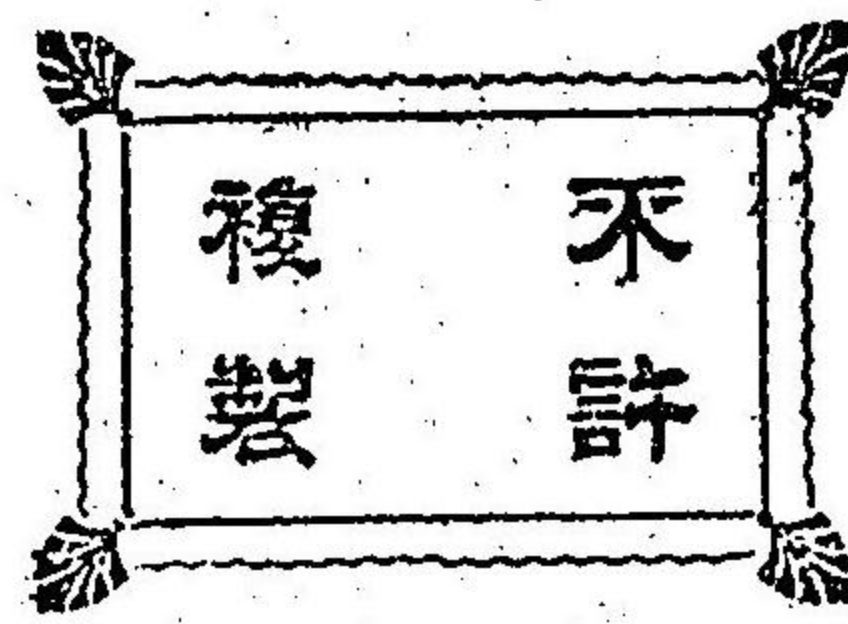
國勢四漸
の兆候

は、空手にして入り空手にして歸るが可い、一物不將來で無ければ眞正の入山ではない、吾人嘗て學人に示して云く、入山須是盡玄微、空手登々空手歸、明月蘆花君莫問、謝郎不在釣魚磯と、箇は是れ舊參底の上士の爲めにする榜樣なり、初心の徒争てか攀躋するを得ん、且く道へ即今是れ如何なる時ぞ、吾が國勢の發展は滔々として西漸の徵候あり、佛教も亦之に伴ふて教勢を擴張せざるべからず、上來鼎中の一昧空疎なりと雖も、聊か吾人の所見を陳して敢て法供養に充つと云。

禪鼎一味終

明治四十五年七月七日印刷
明治四十五年七月十日發行

(定價金五拾五錢)



著	發	發	印	印
者	行	行	者	者
者	者	者	所	所
蘆津實全	中村政之助	服部國太郎	水谷景長	博文館印刷所
<small>東京市日本橋區吳服町八番地</small>	<small>東京市日本橋區吳服町八番地</small>	<small>東京市小石川區久堅町百八番地</small>	<small>東京市小石川區久堅町百八番地</small>	

發行所 東京市日本橋區吳服町八番地 振替東京二〇七六番 文泉堂

著生先澄眞重近 士博學理 科工理國帝都京 授教學大

世の痛棒與塵に微因なりと雖も他の鏡舌に因らずんば争奈でか上座の障録を
 折別せん著者一修眼夙に作家の鐵牛を呵し現人未發の接觸する所以を明かに
 せる者が其論を著す苦心の存する所以を以て座右の友とせられよ……
 世の參禪に志ある士乞ふ必ず一本を購ひ以て現人未發の接觸する所以を明かに

參禪錄

▲洋裝美本
 ▲全一冊
 ▲正價六拾錢
 ▲送料六錢

妙心寺派會長
 豊田毒排師題詞
 南無寺派會長
 河野露海師題詞

不朽の價値を有する本書は益々好評を博し初版以來數千部を賣盡し今や訂正七版出來せり

文序生先富本谷 士博學文 著生先澄眞重近 庵物
 酒濶釘裝 刊新最

一	彈學一夕話	十一	四濟雜照釋師
二	三余が參禪の動機	十二	三金の使者(佛文)
三	四再の信心銘と跋	十三	東郷大將の訓示(獨文)
四	五侯 各論	十五	時
五	六神速歩行術	十六	と物賢
六	七抑、青山の一角歎	十七	國語と哲學
七	八佛敎興隆の三弊	十八	歐洲留學
八	九思ひ出るまゝ	十九	佛敎大師と私法大師
九	十關山圖師	二十	野狐禪

物をか物に非ず釋ぬ可き無し。禪か禪に非ず此の什麼をか會せん。之に對すれば則ち一代の時敎。論說閑話。媚々として盡くることなし。之に倒まてす。擲るも亦た一代の時敎。乾坤は是れ水月場を空す。物庵。乾爛。熾とせし清香袖に滿つ。百華爛の剪得するか若きは則ち行人の分のみ。

●和裝全一冊 正價金九拾錢 送料八錢●

物庵禪話

木版三種
 石版二種
 本英入圖
 プロタイ
 版六種

京都市帝國理工大學教授
理學博士 近重眞澄先生著

禪學論

好 評 洋 裝 菊 判 四 版

正 價 五 拾 錢 送 料 六 錢

著者本書序曰 葡萄の美酒之を喫して快哉と絶叫するものあり、一醉陶然玉山頽れて語らざるものあり要は只その喫處に在りて語處にあらず余が嗷々の長舌も唯聲一快哉と叫べるのみ之に憑て直に禪機を求めんと要せば他の一鼓下に笑はれん且夫禪すでに唯心を説く、知らず心身脱落して能く一元に歸するを得るか萬法は一に歸す、一遂に何處にか歸する是れ會すべくして説くべからざるなり説く事を知つて喫することを知らずんばその一元たるはた焉にか求めん乞一本を座右に而して諸子先づ去つて下の一句に參せよ云如何是心

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天先生著

樂天生活之妙味

好 評 廣

第 八 版

貧中の妙趣
病中の妙趣
不幸中の妙趣
逆境中の妙趣
不如意中の妙趣
害惡中の妙趣
死滅中の妙趣

逆境に有る者の爲に本書を著す何づれも先生が過去の經歷より出で、句々心血の凝結せし所、引例古今東西に涉りて豊富、行文平易流暢にして趣味津々、通讀兩三回にして大悟するの感あるべし

● 菊判新裝釘全壹冊

正價金七十五錢
送料金 八 錢

忽滑谷快天先生著

第三版

宇宙觀

本書の内容は著者が天眞獨語の樂天的人生觀を基礎としたる文藝論◎教育論◎道德論◎宗教論◎人生論等にして眞善美の融合物心の一異道徳宗教の本末宇宙人生の始終等の大問題を平易簡明に説述したる者にして著者が初めて學に志し人生問題に想詢してより樂天生活の妙味を感得するに至る迄三十年間の思想史なり

冊壹全本樂入箱金天裝淨

正價一圓十五錢送料二十錢

東京帝國大學文學部教授
高楠順次郎先生著

理想的教育必讀

國民道徳之根柢

新刊

◎本書は修身と信念との根本的解釋を試み、宗教と道徳との眞意を探り、國民の將來に關して不拔の根據を論定せり。廣く現代の不具面目なる狀態を救済せんとして、博士は本書の論述に於て口語の體を採り、術語を避け、通俗平易の間に高遠なる眞理の陳解を得せしむ、中學教員諸君の好參考書、青年學生の師表、家庭の指導として絶妙の好著也。是れ本書の購讀を薦むる所以、死せる教に飽らし者は本書を讀め

□全一冊洋裝菊版正價金七拾錢送料八錢□

處世
應用
孫子講話

上卷既刊

文藝委員會
原澤柿園先生述

◎全三冊 上卷正價七拾五錢 送料八錢◎
本書は著者明快活脫なる靈筆を以て孫子を現代の生存競争の烈しき活社會に應用し得べく競争の勝敗は勿論外交の進退相場の勝負商賣の損得一家の治め一身の持ち方息災延命の理皆本書に備はれり我國古今の歴史に徴し現代の形勢に例を引き一讀通俗に説ける傍、武士道を説き仁義を論じ知らず、活社會に活動する素養及び處する道を教へんとせる引例豊富興味津々として盡さず諸子一書を座右に而して
現代の生存場裡に應用せられんとす

中卷目下印刷中

下巻編中

樞密院副議長 伯爵 故東久世通禧卿序文
貴族院議員 男爵 杉溪言長君跋文
双劍と歴史 主筆 高瀬羽阜先生述

著者修業美術史入
鑒考刀劍圖彙纂入
●再版出来●

好評

刀劍鑒定備考

●羽阜先生、愛刃家の爲に古刀新刀に就て丁
寧親切に講述せられたる良書なり忠銘の目
利の法、刀紋の區別、作の上中下等悉く此
の一書に網羅せしものなり、愛刃家諸君座
右必備の書なり

▼和裝全貳冊
▼正價金壹圓
▼送料金八錢

◎高島平三郎先生著 最新刊▲

家庭に於ける心理学の應用

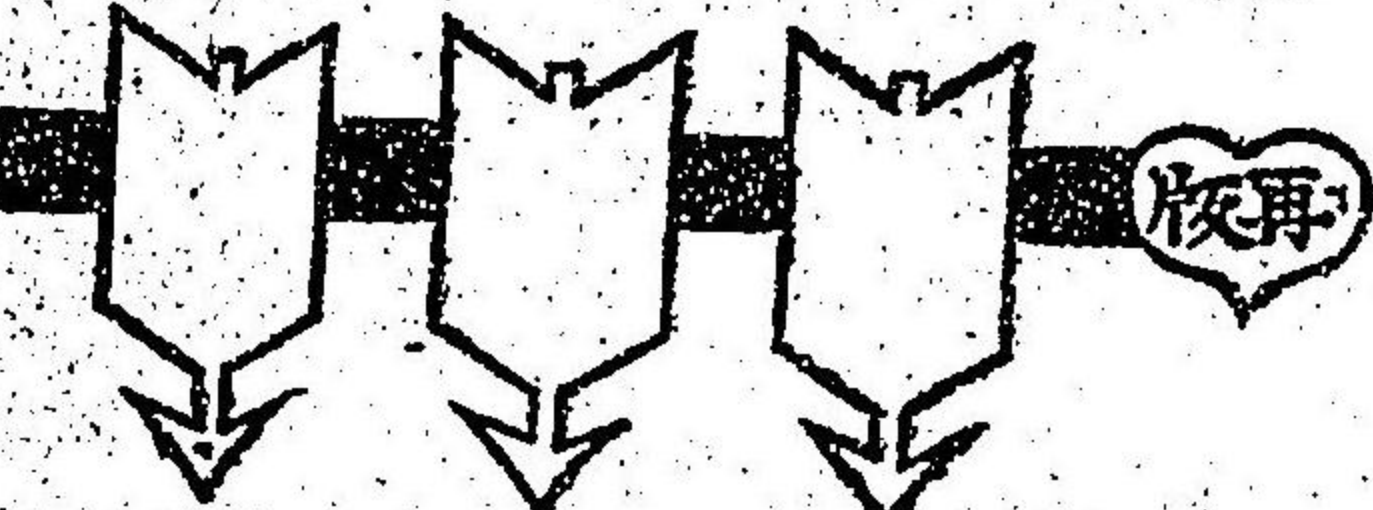
洋装タロース 金文字入美本全一冊 正價九拾錢 送料八錢

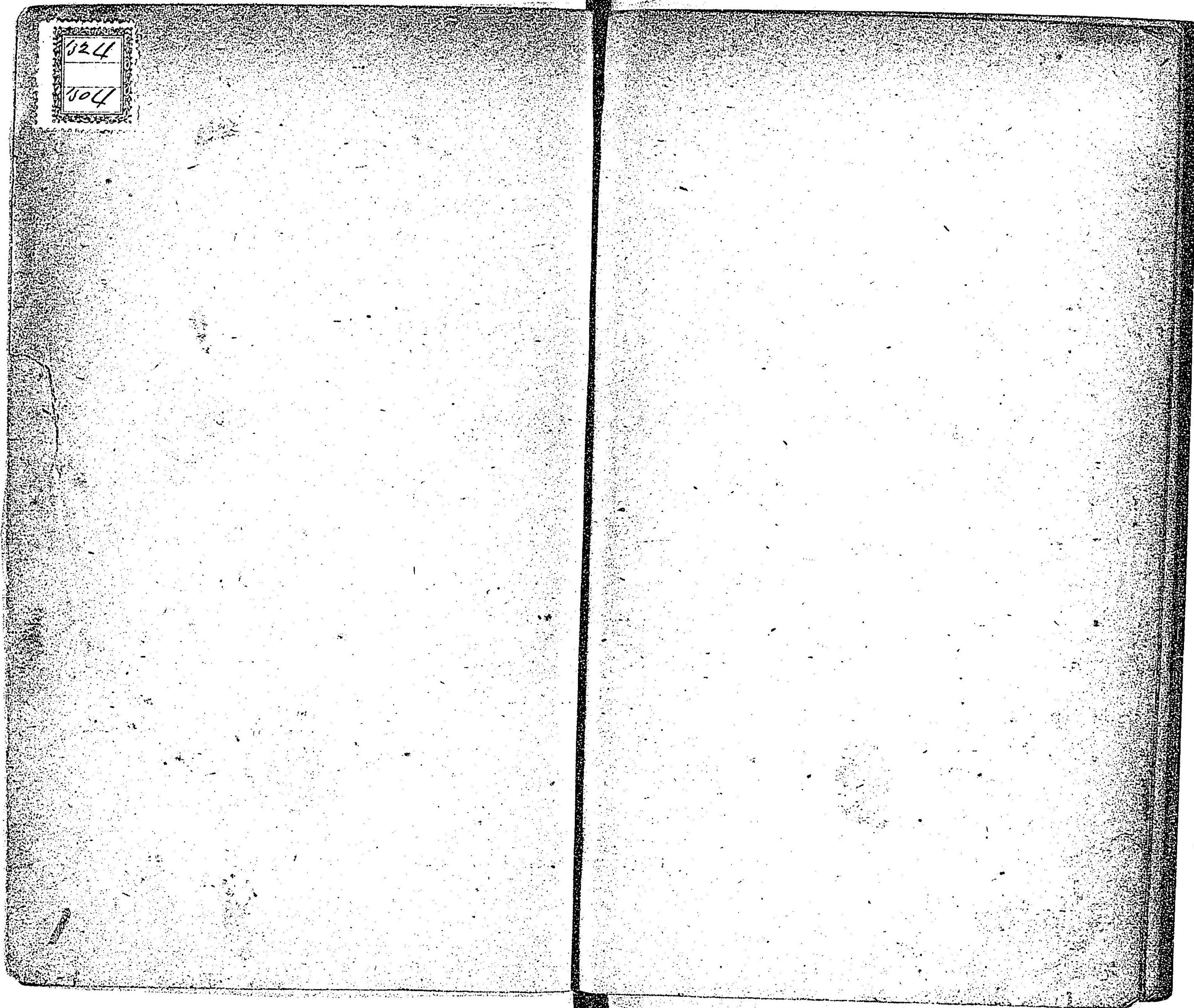
本書は高島先生が深遠なる學識と微妙なる精神作用とを碎いて平易通俗に説き及ぼされたるもの且つ萬事萬物に取つて家庭の主眼の爲めに新發明を與へたるものなり

東京朝日曰く 心理学は人の心の働く有様を研究する學問にして其の研究の對象は眼に見ゆるものならず其の奥にありしを推して其の顯著に表はせらるるものなり

高朝報曰く 心理学の應用方面は甚だ廣きがこれに家庭を扱むる上の助となすに心理學的の何者にして如何に應用すべきかを説き及ぼす

家庭の絶好参考書





1724
1701

11
1101

